
魔王陛下の愛猫

ひーこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下の愛猫

【ZPDF】

Z2081W

【作者名】

ひーこ

【あらすじ】

もうすぐ結婚を控えていたあたしは、とある「令嬢の嫉妬によつて猫になつてしまつた！

結婚するまでは死んでも死にきれないと！

なんとか人の尊厳を捨てて生きたあたしだけど、更に不幸な事につかり空間の歪みに足を突つ込み魔界へと落ちてしまった。

そこで何と！愛しのダーリンと再会、したけど……

あれ？ダーリンが魔王って、どうこと？

しかも、あたしとの愛の日々を綺麗さっぱり忘れてるって？！

プロローグ

それは、本当に些細な心境の変化だった。

散歩に出よう。

突然思い立つたら、どうしても出たくなってしまい、実行した。

敢えて理由をあげるのならば、留守の間に山のようく積み上げられた書類や問題から逃げたかったのかも知れない。

た少し、外の空気を吸いに行きたかった。

空に一面に広がる曇天は、鬱々とした今の心境を見事に現していた。
かさり…、と音を立てた生き物の気配に目を向けて、信じられない
ものを見た気分になり目を見開く。

鬱蒼と茂る赤茶の植物の隙間からこちらを伺っていたのは、灰色と
不可思議な黒い斑が入った毛並み。ピンと天を向く耳と尻尾。

珍しい、猫だ。

猫はこちらを伺うように木々の隙間から顔を覗かせ、そのまま氷漬
いたように微動だにしない。

一見どこにでもいるような野良猫だが、特別に目を惹いたのは、そ
の瞳だ。

日の光をたっぷりと浴びた葉のような緑色。

妙に心惹かれるその色を見詰めていると、途端、猫は弾かれたよう
にこちらへと駆け寄る。

足に軽い衝撃。

「ニヤあん、ニヤあん」

ぶつかるように足へと擦り寄ってきた。

何か懇願するように鳴きながら再び全身で足に擦り寄る。そして印象的なあの緑の瞳で見上げてきた。

恐らく地上界の猫だ。

随分と人懐っこいこの猫は、誤つて空間の歪みに落ちてしまったの
だろう。

良く見ると猫は全身至るところに怪我を負っていた。模様だと思つた斑は血が乾燥し赤黒く固まつてゐるものだったのだ。

地上に比べて、魔界の獣は血に飢えたものが多い。大型の猛獣や魔
獣の類いならばまだしも、脆弱な魔力しか感じられない猫が今この
ときまで生き逃れたのは奇跡に等しい。

だからこそ、滑稽だ。

数々の手傷を負わせた血に飢えた獣よりも、比べ物にならない危険
な存在がすぐ傍にいるというのに。

何の躊躇いもなく、猫がひたすら懸命に足に擦り寄る自分こそが、
この魔界の頂点に君臨する王であるといつていい。

この様は一体何だ？

隠しもしていない自分の内に存在する強大な魔力を感じられないのだろうか？

「このまま猫を放置すれば、間違いなく数刻もしないうちに死んでしまうだろ？」

手負いの猫が生き残れるほど、この世界はそれほど甘くはない。

だが、

あの緑の目の光が見れなくなるのは、余りにも惜しい。

そんな考えが浮かんだ自分に驚く。

戸惑いを覚えながらも、擦り寄る猫に手を伸ばすと、遠慮がちに顔を寄せてきた。それに答えて猫の頬を撫でる。すると猫は、大胆に甘えるように顔を擦り付ける。

抱き上げれば、か細く何度も鳴いて頬を舐める。

ザラリとした感触。

決して不快ではない感情が胸に渦巻いた。

「こ……」

やがて猫は「口口口口と喉を鳴らし甘えるように一鳴きし、顔を抱き寄せた胸に擦り付け、そのままぐつたりと目を閉じた。

あたしとダーリン

あたしは、人“だつた”。

……悲しい事におもいきり過去形だ。

ところの、も、無理はない。頭にはピンと存在を主張する三角の耳、ふかふかの体毛に覆われた身体、地には四本足で体を支え、極めつけにはお尻から流れれるよつた尻尾。

今あたしは、ビニからどう見ても“猫”だつた。

ちなみに毛並みは人だつた頃の髪の毛と同じ蜂蜜色。金色って言つには、黄色の色みが強くて透明感が余りない。嘘でも黄金だとかつて言つにはあまりに安っぽい色だ。店に換金しに行つたら「あ、金じやない何かが混ざつてますね。残念ですが値引きします」とか言われるレベルだ。足下見やがつて。

実はこつそり、ブロンズじゃないことを気にして、いつだつたかポロツとダーリンに不満を溢した事がある。

そしたらダーリンつたら！

あたしの髪の事を「蜂蜜色の優しい色だ」つて言つてくれて！オマケに「甘い香りがする」つて言つて髪の毛に口付けてくれました！！！きやー！！！

……はい。

髪に対するコンプレックスは一瞬にして無くなりましたが、なにか？

そんなわけで、毛並みには人一倍気を使つてゐる。

寝起き、食事後、就寝前のグルーミングは特に欠かせない。尻尾まで毛並みを整えるのが日課だ。

頭から背中にかけて撫でられる感触。

ちらりと田線を上げると漆黒の瞳とあたしの緑色の田がかち合ひ。

愛しのダーリンだ。

瞳と同じく漆黒の髪は短いので、じゃれつけないのが残念でならない。

切れ長の田とスッと通つた風貌はどこか異国の方を感じさせ、最高に色っぽい。鋭い目付きと物憂いげな美貌と相まってどこか排他的な、冷たい印象を感じさせる。それでも笑うと途端に幼い印象になるのをあたしは知つてゐる。

高い背丈なのに威圧を感じるのは、優美で綺まつたしなやかな体つきのせいだろう。

遠慮がちに、そして恐る恐るとあたしを撫でる手つきはめぞこちない。お世辞にも撫で上手とは言えなし、大きな手のひらには剣を握る者特有の堅さがある。けれど、この手は間違いなくあたしが愛している人の手だ。

その事実に、あたしは思わず「うう」と田を細めてしまつ。

そんなに慎重に触らなくても、あたしはそう簡単には壊れないよ。

そう言いたくとも、残念ながらあたしの口からは「にゃー」という鳴き声しか出なかつた。……後、喉が「ロロロロ」とも鳴つてますが。

まだ、あたしが人だつた頃は、ある国で姫様付きの侍女をした。

ダーリンは、騎士団の部隊長で、とある伯爵家の養子で、将来有望

な出世株。さすがダーリン！

顔良し、頭良し、有力な後ろ楯アリ。

…とくれば、そんな三拍子揃った有力物件を周りは放つとかない訳で、あっちコツチでダーリン争奪戦が繰り広げれた。

ダーリンと私が結ばれるまで色々と、涙無しには語れない大変な事がありましたとも、うん。

そんな苦難を手取り足取り取り合ひて、愛するダーリンとあたしは見事！婚約までこじつけた。

結婚まで後、数日。

本来、あたしはそんな儀式をしなくとも、お互いの心さえ確認できれば、と軽んじていたが、いざ、する側になつて初めてその神聖さを理解した。

愛する人と夫婦の契りを交わす。

それがどんなに恵まれている事か。すべての人に祝福され、祭壇で永遠の愛を誓うという事が、何に憚ることなく結ばれるという事が、どんなに幸福かということに。

そんなときに、あの忌まわしい事件があたしの身に降り掛かつてしまつたのだ。

ダーリンに一際熱を上げていたご令嬢から、お茶会のお誘いを受けたのである。

始めこそ、あたしは「のこのこと顔を出せば、どんな嫌がらせを受けるかわかったもんじゃない！」と断つていたが、身分だけはやらと高いご令嬢に半ば強制の形で約束を取り付けられてしまった。

お茶会进而。

対面に座り顔を合わせた「ご令嬢の日に」、ギラリと鈍く輝く狂氣の光を見て、「ご令嬢が抱くダーリンへの思いが、遙かに基準値を越えている事にあたしは初めて気が付いた。

正直私は油断していた。

こう見えて、姫様付き侍女、そしてダーリンの婚約者といつ肩書きに落ち着くまでは、世界中を巡りそれなりに名の売れた冒険者だったのだ。

「ぶつちやけると、現役騎士職のダーリンよりも腕に自信がありましたとも。

例え暗殺者に取り囲まれても、逃げ切る自信が私にはあった。

そんなあたしが警戒するのは、毒物のみ。

…お茶？

目の前で入れて貰つて、もちろん「ご令嬢が飲んで、何も無いのを確認してからあたしも飲んだ。

「…お茶菓子？」
ご令嬢の妹が食べてたから、何も無いのを確認してからあたしも食べた。

それなのに！

まさか、お茶とお菓子を両方食べたら作用するなんて、一体どんな手の込みようなのやら。

こんな事ならお茶だけにしつぶんだつたと嘆いても、身体の熱は消

えない。

だつて、とつても美味しそうだつたもの！

私の食意地まで計算された見事な作戦に負けてしまつた結果、気が付けば猫になつていた。

それからは、散々な日になつた。

お茶会はご令嬢の邸で行われたので、王都に戻る為に何日も猫の身でさ迷うハメになつたのだ。

獵師さんに毛皮にされそくなつたり、逃げ込んだ森の中で迷子になつて食えたり、獸に襲われたり、生ゴミを漁つたり……正直、人としてのプライドを何度もブチ壊されたが、その度に、諸悪の根源であるあの令嬢を思いだし、「ぜつたい泣かす！」と固く心に誓つて乗り越えた。

といひが、ぐにゅりと歪む空間に足を滑らせ、状況は一変した。見たことがない植物に半端なく恐ろしい魔獸が生息する想像を絶する世界だつた。

いつかは冒険しに行きたいな、と呑気に考えていた魔界、である。人のままなら手放して喜んだであらう災難も、猫の身ではさすがに血の気が引いた。

持ち前の反射神経を駆使して迫り来る牙や爪、炎などからギリギリで避けたり、うつかり捕食植物の蔓に引っ掛かり危うく溶かされそうになつたりと、体力を著しく消費し、さすがのあたしも死を覚悟した。

そんなとき、偶然にも探し求めていたダーリンと奇跡的に再会を果たしたのである。

あーん、会いたかつたよーう！

あたしは形振り構わずすつ飛んで、全身で喜んだ。
ダーリンに抱き上げられたあたしは、安心できる温もりを感じ気が
緩み、いつの間にか寝てしまっていた。

そうして畠を覚ますと、再びあたしの頭を悩ませる事態になつたの
である。

……あれ？ ダーリンが魔王って、どうこと？

あー、幸せ…

闇色のマントの上に丸まり、至福のおぬ寝タイムのあたし。このマントはダーリンが着用していたもので、ダーリンの匂いがたっぷりと染み付いている。オマケに保温効果、通気性、耐久性にも優れた逸品物だ。

「レディ様！ も、それは陛下のマントです！」

気持ち良くなっているのに無粋な真似をしてくるのは、ダーリン付きの侍従だ。

まだ幼さを残した顔立ちで、くいくつの白い毛に半のようない角が頭の両方に生えている。

あたしを退かしたいのならマント」と捲り上げればいいのに、それをしないのは万が一あたしの爪でマントが傷付かないようにするためだらう。

でも、そんなことはただの杞憂に過ぎない。さすが魔王陛下の愛用のマントは、あたし」ときが寝惚けて爪を立てても引っ搔いても、破れるどころか傷ひとつ付かないのだから。きっとドリラゴンの炎だつて遮るに違いない。

そんなことも露知らず、羊美少年は懇願するよつにあたしへ必死にいい募る。

そんなに邪魔なのなら、しつしつ！ とあたしを払えばいいのに、この子は一度もあたしに無体を働いたことがない。あたし自身が退けるまで根気強く、ひたすら近くで粘るのだ。しまいには、うるさい青い瞳に涙を溜めるのだが、それが非常に可愛らしい。美少年に哀願されて心が動かないほど、あたしは冷たくはないので

愛らしい泣き顔をたっぷりと観賞したところ、「よつよつよつよつ」と腰をあげるのがいつものパターンだ。

「あああ、毛が……」

今の所、ダーリン愛用のマントを毛だらけにしても、引っ付いてダーリンに擦り擦りしても基本的にダーリンからは直接何も言われた事はない。

嘆く羊美少年を尻目に、あたしは日課のグルーミングに勤しむのだった。

毛だらけのマントと羊美少年をそのまま置いて、あたしは早速ダーリンの元へ向かう。

謁見の間の玉座か執務室にいる事が多いので見付けるのは簡単だ。入り口にちょこんと座りダーリンの仕事振りを観察する。ダーリンがチラッとあたしに気付いてから、きりのいいところでダーリンに近づいてゆく。これもいつもの事だ。

慣れた動作で膝に登り、胸に前足をかけて……

ちゅつ

これまた日課となつたキスをする。

ダーリンは喜ぶでもなく嫌がるでもなく、身動きもしない。ただされるがままだ。もつ少し反応してくれてもいいのに、あたしの一方通行で少し悲しい。

でも、嫌がつてないつて事はやつていいつて事だよね？

「口、口と頬に擦り寄る。

その様子を生暖かい手で見詰めてくるのは、たしか宰相さんだ。

「いほんつ」

ワザとらしに宰相さんの咳払いが聞こえたら、引く頃合いだ。ダーリンの肩によじ登り、そのまま背中と玉座の間に身体を滑り込ませる。

心地よい温もりに包まれながら、そのままうとうと寝入るのだった。

また寝るのか！ と自分でも呆れるが、どうも猫になつてからやたらと眠たくて仕方がない。もともと昼寝が好きな性分だったもので、この事態も慣れればなかなか快適で過ごしやすい。

ダーリンの傍にいれるしね！

人のままで、とてもじゃないけれど……

あれ？ そのまま結婚してたら、あたしどうなつてたの？？

素性のちょっと怪しい侍女に、将来有望な騎士さま。

「これであたしも貴族の仲間入りなのね。完璧な妻としてダーリンを支えるぞ！」と意気込んでいたあたしだが、対してダーリンは、とんでもない秘密を隠してくれていた。

まさか、あたしは自分の夫になろう人が魔王陛下だなんて、これっぽっちも知らなかつた。

思い当たる節なんてまったく……いや、今思えばちょっとくらいあるような……

いつだつたか、広間のシャンデリアの鎖がブチッと千切れた時、丁

度あたしは真下でその光景を見た。キラキラと光を反射させながら落ちて来る巨大なシャンデリアを見ながら「うわあ…綺麗」だとか間の抜けた感想を抱いていた時だつた。

あたしの視界が一瞬にして暗闇に包まれたと思つたら、気が付けばダーリンの腕の中にいた。そういうえば足の床が抜けたような感覚も合つたような気もする。

あの時は、碎け散るシャンデリアがあまりに綺麗だったから、真下にいたという事実を錯覚だと思う事にしたのだ。

幸い死者が出る惨事にならなかつたが、ダーリンが助けてくれなければ、きっと美しいシャンデリアの下で醜く潰れて死んでしまつていただろう。

今更になつてその時の恐怖にぶるりと身を震わせる。

「一体どなた様のお陰で、この世界が保たれているのか。愚かにも忘れてしまつたようですね」

聞き覚えのある声に、思わずピクリと耳が動く。

この声は、あたしが働いていた城の元侍従長の声だ。

ピッカリ分けた前髪とダンディーなおヒゲがチャームポイントの洗練された動作の紳士だ。

カツチリと真面目そうに見える装いの中に、茶目っ氣を隠し持つており、あたし達侍女仲間の間でも好評価な人物だつた。

なんでも、元々魔界出身……、というか闇の精霊らしく、なんとか六柱……名称忘れてちゃつたけど、ダーリンに絶対忠誠を誓つてるだとか。

実は侍女時代に、ことある事に口説かれていたあたしは、なるべく顔を会わさないよつに注意を払つていていたのが、

その口説き文句は、

「お願ひします。どうか貴女の生む御子様の名付け親になる権利を、

どうかこの私めに！」

……はい。

今なら解ります。

そういう事だつたんですね。紛らわしいのよ、つたく！

魔界で見つけた顔見知りは、元侍従長だけかと思つたら他にも知つた顔がチラリほらり。

極めつけにはダーリンの後見人だつた伯爵は、魔界の剣術顧問で、その、なんとか六柱の一人だつた。

つまりは、どいつもコイツも！ グルだつたのである。

はじめての謁見

何だか穏やかじやない会話が続いている。

「恐れながら、自身にそがこの魔界の王だと主張しております」

「……少し留守が長過ぎたか。これ以上図にのらって私を呪われるも厄介だ。……潰すか？」

ダーリンが魔王をやつています。

玉座の手摺に気だるげに膝を付き、見下すような横柄な態度のダーリン。跪き胸に手を添えながら謙虚な姿勢の元侍従長。力関係が一目瞭然なこの図は、始めこそ驚いたが、まさしく王者の貴祿がでているダーリンを見て納得した。背中越しでもビリビリ感じる威圧感は上に立つ者特有のものだ。

そんなブラックなダーリンも素敵いいー！

「「いやーー！」

おっと、興奮の余り思わず鳴いてしまった。

今までの張りつめた、どこか好戦的な空気があつとこいつ間に消えてしまつ。

あ、どうだ。

あたしに気にせず続けて下さい。

今のおたしはただの猫。魔王陛下のにゃんこでござります。だから物騒な話なんて、関係ない関係ない。

「おや、もしややせらうが噂に聞くレディ様ですか。せつかくです
ので挨拶をお許し頂けますか?」

そつそつ。

実は魔界でのあたしの名前は、『レディ』だったりする。
更に説明すると、付けたのはダーリンではなく宰相さんだったりす
る。

身体中余すところ無く傷だらけだったあたしは、ダーリンと再会し
て気が緩み、そのままぐっすりと寝てしまい、気が付いたらダーリ
ンの寝室だった。

しばらくダーリンの寝室で怪我の養生をしていたのだが、どうやら
その時に、ダーリンは寝室に入室禁止令を発足したらしく、疑問に
思った宰相さんが乗り込んできたのだ。

「一体どんな淑女レディが貴方を虜にしたのかと思えば、『れは……』

ボロ雑巾のようなあたしを見た、宰相さんの第一声がそれだったの
だ。

まさかそのまま名前になるとは思わなかつた。

……誰もが一度は子どもの頃に親に隠れて生き物を拾い、自分の部
屋で匿つたりするけれど、まさか魔王陛下にまで近づくとは思
つてもみなかつた。

そんな子供っぽいダーリンも大好きですが、何か?

あたしが軽く現実逃避してくるとダーリンはゆっくりと額を、玉座
を立つた。

え、なんでそこでいきなり立つの?

天下の魔王陛下を差し置いて、ふかふかかつ、ゴージャスな玉座に一人だけ座るだなんて、何て恐れ多い。

だが、まさかの魔王陛下の起立にあたしは対処しきれず、いきなり消えた温もりに身体は丸まり、いつもピンっ立つた耳は情けないくらいに頭にペちゃんとなつた。

謁見の間にいるのは、ダーリンとあたしと元侍従長だけではない。実は護衛の人やら、侍従のひとやら沢山いるのだ。彼等の視線が一斉にあたしに集まる。

しかも、そのほんどうが角が生えてたり鱗がついてたり、一番怖いのは爬虫類の顔で舌舐めずりした人だ。一度だけだつたけど、しつかり見ましたよ。美味しそうなんですか、あたし。

「……ミライミライ」

緊張で口を何度もぱくぱくし、やつと出た鳴き声が、コレだつた。

あああああ、恥ずかしくつて穴に入りたい！ あたしいついちおう、これでも成猫なのにい！

甲高い子猫のような鳴き声が広間に響く。助けを求めるようにダーリンに向かつて鳴いたのに、肝心のダーリンはあたしを見てるだけで助けてくれない。

あの婚約時代に、あたしを見かける度に顔を綻ばせて寄つてきたダーリンは一体どこに行つた？

実際に、今の魔界でのあたしの現状は放置に近い。たまにダーリンが気が向いたときだけ、壊れ物を扱うよつとあたしを撫でてくれるだけだ。

今のダーリンはあたしを見かけても、寄つてくるビックロが目を細めるだけ。それも愛情じゃない。例えるのなら観察のそれに近い。

あたしが“猫”だからではない。

例え、“人”的ままだとしても、恐らくダーリンは同じく視線を寄越したことだろう。

ダーリンは、何故かあたしとの愛のメモリーだけ、綺麗さっぱりと忘れてしまっていたのだから。

チクリと胸が痛む。

「ほほほほほ、そう固くならなくとも。私は魔神六柱の一角を担つておりますネメシスと申します。以後お見知り置き下さいます、レディ様」

猫にまで丁寧に挨拶をしてくれるなんて、さすがダンディーかつ紳士だ。お陰で少し雲行きの怪しかった心中が晴れる。でも、子どもの名付け親の権利は譲りせんよ？

「レディ様のお陰で魔界は晴天続き。穏やかな日々が続いております。僭越ながら魔界の住民を代表して、この場でお礼申し上げます」

?

よくわからぬけど、晴れ女、もとい晴れ猫つてこと？

「今回は急な場でしたゆえ、気が利かず申し訳ない。レディ様は最近地上から来られたとお聞きしましたが、魔界の魚……、ドン・グラなどはもうご賞味なさいましたかな？」

なにそれ、美味しいの？

「まつまつ、どうやらレディ様は気になるようですな。それでは次

回に持参致しましょ」

あたしへの謁見？ も無事に終わり、再びダーリンが玉座へと戻る。玉座とダーリンの隙間はやっぱり安心する。安心するが……助けてくれなかつた怨みを込めて、ダーリンに初めて猫キックを食らわした。

ちょっと痛そうに身動いたダーリンに少し溜飲を下げる。

猫の心、飼い主知らず

「一ニヤツ一ニヤツ
「フシャーーーーーー
「ニヤおーん

あつちでも猫！ 一いつちでも猫！ 猫猫猫！

千年の歴史を持つ魔王城にて、前代未聞、未曾有の猫ブームの到来していた。

ブームの火付け役はもちろん、あたし。

あたしの初めての謁見から数日が経ち、魔界の至るところに噂となつてゐる。

“魔王陛下は猫がお好き”

噂を聞き付けた人達が、競うよつにこぞつて“猫”といつ“猫”が魔王陛下へと献上された。

あたしと同じ地上の猫から「うつふん」と色氣たつぱりの猫耳なお嬢さん方まで、ありとあらゆる「やん」が魔王城へと集結したのである。

特に猫耳のお嬢さん方なんかは歩く度にしつぽがくねくねと扇情的にくねり、正直田のやり場に困る。

最初こそあたしは、猫好きのダーリンが他の猫を可愛がつたりするのかと、心中穏やかでは無かつた。だが、新参モノの猫も必要以上ダーリンに近付かなかつたし、ダーリンもあたし以外の猫を寝室に入らせたりはしなかつたのである。まあ、あたしが勝手に寝室に入

つていつているだけなのだが。

ダーリンの寵愛はあたしのモノよつ！

と思つたり、気分が良かつたのも事実である。
そんな訳で、魔王城が猫の巣と化しても、さほど変わり無い日常が
続いた。

いつものように田を覚ましたあたしは嘆く羊美少年を華麗にスルー
して謁見の間へと足を運ぶ。

いつものよつにピタリと立ち止まり、黒髪に氣付く。

ダーリンの玉座の両脇に、お色氣たつぱりの猫耳お嬢さん方が侍つ
ていたのである。

「…………」

思わず責めるよつてダーリンを見詰める。

「…………」

対するダーリンは観察するよつな視線。

「「ホンッ」

宰相さんの促しでひとまづお互いの視線は外れた。

いつもならあたしはそのままダーリンと玉座の間に入り込み、再び
寝をするのだが、

「…………」

このままダーリンの膝の上で丸くなる。

ダーリンの視線が頭に刺さるが、そこは異論を認めない。

猫耳を両脇侍らしているのに、あたしが膝にいるのは許されないと
いつのまにはずだ。いや断固として譲るものか！

そのときだつた。

何気なく視線を流したあたしは右脇のお嬢さんと目があつた。
お膝の上のあたしとバチッと視線が絡む。

「…………」
「…………」
「…………」

一瞬の邂逅。

フツ

勝ち誇つたように弧を描く口元。見下すような、いや、明らかに見
下している目。

今、あたし見て笑つたわね！？

しかも、何か凄く馬鹿にしたでしょ？！？

「シャツ！」

あたしは喉から鋭い鳴き声で威嚇する。

一喝した相手は猫耳のお嬢さん…………ではなく、ダーリンにだ。
お嬢さんに挑発的に嘲らわれ気が立つていたあたし。あろうことか、
ダーリンはあたしの尻尾に、全身毛を逆立て一倍に膨れ上がつてい

たあたしの尻尾にいきなり触つたのだ。

……確かにふわふわのあたしの尻尾は魅力的なのは認める、認める
が今は勘弁してほしい。

怒られたダーリンは気まずそうに手を定位位置に戻した。

あたしはと言つと、思わずダーリンに牙を剥いてしまい、ちょっと
自己嫌悪に陥つてしまつた。猫耳への苛立ちを反射的にとは言え、
ダーリンにぶつけてしまつたのだ。とりあえず自分の手を舐めて氣
持ちを落ち着けようとするが上手くいかない。
こういつ時は気分転換に散歩をするに限る。
ト、つと軽く足音を立てて床に降りる。

背中に感じる視線を振り払い、謁見の間を後にした。

つまり逃げてしまつたのである。

逃げた先にも、悩みの種は待つていた。
災難は続くものである。

今、あたしの目の前に立ち塞がるのは、あたしより身体が一回り大
きい白い毛並みの猫。

たくさんの猫たちがダーリンへ贈られてきた次の日。魔王城では至
るところでキャツツファイトが繰り広げられた。

実はこの猫は、この魔王城にたくさん贈られてきた猫たちの頂点に
いる存在。つまりはボス猫なのである。

あたし？ もちろんそんな物騒な催しには参加していません。

しかし、今あたしは猫。

キャットファイトに参加していないあたしの順位は、この猫社会では限りなく低い位置にあった。

ボス猫である白猫に遭遇してしまつたら、田を会わせずに速やかに縄張りを出なければならなかつた。

普段のあたしなら、そそくさと退散するところ……なのだが、

「フーッ！ フーッ！…」

「フウウウッ！…」

虫の居所が非常に悪かつた。

かくしてコングが高らかに鳴り響いた。
ような気がした。

その日の夜、ダーリンが妙に豪華な食後のおやつを持って寝室に帰つてきた。

「どうやらダーリンには全てお見通しひし。愛の力…

明日から！

この魔王城で！

あたしは真の女主人として、堂々と闊歩できるのだ…！

ふつ、と黄昏る。

まあ、なかなか大変な激闘だつた。引っ搔き回して、噛み付いて、飛び付かれつかれて組んず離れつ……

だが、所詮はあたしの敵では無かつたという事だ。

明日とこ「つ」日が待ちビ情しくて仕方がない！

この際謁見の間での事はお互い水に流す。

早速労つて貰おうと、上機嫌で出迎えた。

「……レディ、傷が

あたしの名譽の負傷に気付いたダーリンは、どこか心在りありと呟く。
んもうー！

あたしは鼻息荒くダーリンの足に刷りよる。

一対一の時くらには、きちんとあたしを見て欲しいものである。

あたし、頑張ったのよー！

今日の武勲を必死にアピールしていたあたしは、いきなり足からひつぺがされた。

いきなりの少々乱暴な動作に、抗議をあげようと顔を上げ、ダーリンの顔を見て固まる。

鋭く軽薄に細められた目に感情を映さない闇色の瞳。それなのに薄く開いた唇には笑みが僅かに浮かんでいた。

怒つてゐる。

なんだか、よくわからないけどダーリンが怒つてゐる……！

まさかのダーリンのお怒りだ。怒つたダーリンは半端なく怖い。やがてあたしの全身を舐めるように眺めた後、「いや」と鳴きかけて固まつた半開きの口のあたしを置いて、ダーリンはどこかに出掛けてしまった。

パタンっと存外丁寧に閉じられた扉がダーリンの姿を隠し、怒りの矛先が自分で無かつた事に、あたしはホッと息を吐く。

しばりくすると、真っ青な顔をした羊美少年があたしの傷の手当にきた。

その日の天気は珍しく雷が鳴っていた。

「レーティ様、それは陛下の……って、あれ？」

ダーリンのマントの上でたつぱりと熟睡したあたしは、グルーミングもそこそこに早速出掛けた。

羊美少年はマントを手に、何だかちょっと物足りなさげにあたしを視線で追ってきたが、『じめんね～、今日はちょっとかまつてあげられないのよ～。

とととととと、と軽快な足取りで廊下を歩く。いつもならば足音なんて立てないが、今日ばかりは特別だ。

なにしろ女主人のお通りである。

と、あれ？

異変に気付く。

昨日あんなに城内にそこかしこにいた、猫猫猫！ が綺麗さっぱり姿が見えないのである。

「？」

しばりくわロウロと魔王城をさ迷つたが、猫がいたといふ痕跡すら見つからない。

なんだか小鬼に悪戯されたような気分だ。

「ああああ、しまった！ レディ様ー！ 出できてトセー、陛下に殺されるー！」

物騒な羊美少年の声に何事かときた道を戻る。

あつさりと捕獲されたあたしは再び寝室へと戻されてしまった。

の、命ですからね。」

むう、今日は大事なデビューの日なのに。でもダーリンのお願いなら仕方がない。デビューは明日にしよう。

不満と了承の意を込めて、バタンバタンと尻尾で床を叩く。
足の怪我を舐めながら、渋々羊美少年を見上げた。

「心配しなくとも陛下がレティ様が安全に過ごせるよう、猫をちゃんと追い出してくれたんですね～」

なんですか？

あたしの華麗なお披露目の、無期延期が決定した瞬間だつた。

「僕は始めから、ちゃんと書いてたんですよ。仔猫ならともかく成猫は繩張り意識が強いからやめた方がいいって、それなのに……って、レディ様！？ マントの端っこ咬まないで下さい！？」

の田、あたしが一田くそを曲げた。

随分と長い、眠りについていたようだ。

未だに頭がぼんやりとし、思考の収束がつかない。

しかし、魔力の枯渇の状況から手っ取り早く回復するために、確かに地上で休息を取っていたと記憶しているのだが、いつの間に魔界へと帰ってきたのだろうか？

＊＊＊

留守の間はシユベルが万事計らつてくれていたようだ。

無限と続く界の狭間にて、空間を押し広げ、そこに世界を創ったのは、たしか千年ほど前の事だ。

千年。

それほどの日日が経つたと考へると、少々感慨深いものがある。

空間を押し広げた当時こそ、歪みが絶えなかつたが、千年経つた今では世界と随分と安定している。

長く留守にしようとも魔界も城も大事なく機能している。

永きに渡り世界の礎となってきたが、そろそろお役御免となる日も近いかも知れない。

だが、もしそうなつたら、

俺には一体、何が残るのだろうか？

＊＊＊

猫を拾つた。

鬱々とした気分のまま散歩出掛けた先で拾つた。

本来、動物には好かれない。

内に内包する巨大な魔力を恐れ、近付こうともしないのだ。
それなのに、恐れるどころか懐く。

一身に慕つてくる猫にくすぐつたい気持ちになりながら、同時に締め付けられるような不可解な胸の痛みも感じる。

気になるのは、猫の瞳。

あの緑色の瞳を見ていると、妙に暖かい穏やか気持ちになると同時に、抉り出したいという狂暴な矛盾した気持ちに駆られる。

一面に別れた感情は、責めきあつ度に結局決るのはいつでも出来るところ結果で決着をつける。

しばらく寝室で置つことにしたら、あつせりシユベルに見つかった。せつかく帰還したばかりで、何かと慌ただしい城内に気を遣つたといつの上。

新たに部屋付きとなつたヴォレのアビルに、レティの世話を任せる事にする。

アビルによつて綺麗にされたレティの毛並みは蜂蜜色だつた。（猫の名前はシユベルが付けた）

清潔になつた毛並みを撫でると、気持ち良さを細める。

少しばかり慎重に撫でてしまつのは、幼い頃に魔力の暴走で簡単に死んでしまつた飼い犬を思い出すからだ。

強い魔力も加護も持たない動物はあまりにも脆い。

シユベルに「そろそろ俺は不要か」愚痴を溢したら、

「なにを言つているのですか！　一時でも私が魔界を治められたのは、貴方がちゃんと基盤を固めたからこそです！　それでも私がどれ程薬湯を消費したことか！」

と、怒られてしまった。

まだまだ隠居はできないらしい。
せつかく良い連れが出来たと思ったのに。

＊＊＊

炎獄地方のとある領主のひとりが、かの地を平定したらしい。
炎天の地の者は、燃え盛る大炎の」とく気が荒い。放置すれば燃え
尽きるまで周囲を巻き込み、やがて無と返すだろう。
業火になつて火の粉がこちらに及ぶ前に、速やかに鎮めなければな
らない。

ネメシスに消火の任を授ける事にした。

そういうえば先日、アビルの父親リムトンが挨拶にきた。
以前、眠りにつく前に部屋付きだつたりムトンは、怪我が原因で引
退する事になつたのだ。

残念な顔を伝えると、緊張している息子を示し、

「ビシビシ鍛えてやつてやれー」

と朗らかに笑っていた。

ヴォレ族の特徴として、非常に防御に特化しているが故の抜擢だろう。

いざとこつとさこは直にしるとこつ事だ。

リムトンが怪我をしたと言ひことは、……そつ言ひ事なのだひつ。

追記

ネメシスとレディを引き合わせた。

仔猫の様に鳴くレディに、いつものように好き勝手にしているふてぶてしさは欠片も見当たらない。

謁見の後田。

ネメシスは宣言通り、レディに魔界の魚、ドン・グラを持つてきた。魔界を代表する珍味の一つであるこの魚は大変に大きく、レディ独りでは食べきれる物ではないので城の者にも分け与える事にする。

早速レディにドン・グラを与えてみたが、小声で喋るよつな鳴き声が聴こえてきたので驚いた。

口一杯に頬張り「あうあうあう」と声を出しながら夢中で食つていた。

あつとこつ間に器を空こし、更には催促するよつと口をへらつと舌

舐めずりし、じぢりを見詰める。

「どうやら大変お気に召したらし!」

あまり甘やかすのはいけないと思つが、どうもこの皿で訴えられると弱る。

ショベルに見つかると小言を言われるので、自分の皿から調理されたドン・グラを落とした振りをして分け与える事にする。
偶然落ちたものが、偶然レディの器に入つただけだ。

何も言われまい。

余った分のドン・グラは、食べずに長期保存に適した燻製にするよう指示しよう。

近頃、更に空間の歪みが目立つ。

報告を聞くだけでも、無視できない状況が多い。

もしかしたら誰か上位の存在が、魔界に出入りしているのかも知れない。

歪みが増えれば、それだけで魔界の存続が危なくなる。安定しているようで、まだまだ不安定な世界だ。

領主の離反に空間の歪み。

まだまだ問題は絶えそうにない。

＊＊＊

猫という猫が献上されてきた。

多少反対があつたがせつかくなので、全て受け入れる事にした。

レディの遊び相手に丁度良い。

＊＊＊

レディは氣位の高い猫だ。

氣分の悪い時は誰であろうと容赦はしない。

触つたら牙を剥かれてしまった。

引っ掛けこそはしなかつたが、素つ気なく何処かへ行ってしまった。

新たにやつて来た猫は、どれも恐れ近付きもしないのに、やはりレ

「ディは普通の猫ではない。

損なつた機嫌を直して貰つたために、今晚はおやつでも持つてこいつと思つ。

しかし残念ながら、ドン・グラは燻製過程の真つ最中で諦めざる負えない。

その日の夜、おやつの匂いを嗅ぎ付けたが、あつさつ機嫌良くなつてくる。

少々拍子抜けしたが、すぐに異変に気付く。

レディが怪我をしていた。

事の次第を確認する為に部屋を後にする。アベルにレディの手当を命令しておいた。

事態はあつたり解説される。

猫といつ猫は、その口の内になんとかするよつて命じた。

これで大丈夫だらう。

猫は大きな獣が苦手です。

吹き荒れの空風の中、やゝとの事で見つけた木の「木に身を潜り込
ませる。

頭と両足を縮めて何とか入れる隙間は窮屈で仕方がない。けれど雨ざらしよりも遙かにマシだ。ブルリと全身を震わせ、顔が届く範囲で毛並みを整える。

あたし、晴れ猫じゃなかつたの？

そんな事を思いながら、強くなつてゆく兩足を絶望的な氣分で眺める。

そもそもの原因は、考え方ナシに飛び出してしまったわたしにあつた。

事の始まりは、ダーリンの執務室での出来事だった。

ダーリンの「オイ」が、いつもと違う」とに気がついたあたし。

身を任せてダーリンの体をニオイまくっていた。

途中にあたしの身体をダーリンに擦り付けたりして、ニオイを消そうと試みたりしたのだが、まったく効果なし。

「……」

すると、何を思ったのかダーリンが持っていた羽ペンをあたしの鼻先にチラつかせたのだ。

「…」

目の前でチョロチョロする白い羽先。

ぴぴーーん！ とあたしの耳が上を向く。

ニオイが気になつてているのに、羽についつい目が釘付けになつてしまつ。ムズムズと身体中が疼く。

こうなると居ても立つてもおれず、羽田掛けてビシバシと手を繰り出す。

ああ、猫の本能……

行つたり来たりする羽を追い掛け、やつぱりあたしも行つたり来たり。

しかも執務机の上なので、あたしが書類で足を滑らしたりぶつけたり散らばつたり。

ダーリンが仕事をしている間は、出来るだけ迷惑かけないように大人しくしよう、と決めていたあたしとしては、今の状態はかなり不本意な状況だ。

あーん、ダーリン。そろそろあたしヤバイと思う！

はやく止めないとあの人気が、例のあの人があたし達を引き裂いてし

まつ……！

どうあっても止まらない本能。

止めてくれないダーリン。

……ちよつと悲劇のヒロインぶつてもいいじゃないですか。

「ウオッホンッ」

そらきた。

陰を含んだ咳払いにダーリンもあたしもピタリと止まる。

振り向くと、やつぱり例のあの人、宰相さんがいた。

この人の存在は、いろんな意味恐怖だ。

まず、名前が覚えられない。

とても長つたらしいとか、同じ単語が言葉遊びのように続くとか、そんな理由ではなく、ちょっと別の事を考えたりすると本氣で頭から抜けてしまう。

もちろん、それは名前に言えたことではない。

姿形に対しても一緒だ。どんな髪の色だったか、どんな容姿をしていたか、これまたさつぱり覚えていられない。

そんなあやふやな存在感の人なのに、存在そのものは頭から消えない。

存在は認識できるのに、形が記憶できない。

つまり、仕事中にダーリンとイチャついていると、絶対に邪魔しにやつて来るおつかない人がいるのは覚えているのに、それがどんな人だったのか全くわからないのだ。

こうして対峙していると、はつきりと思い出せるのに。

「何をやつてるんですか、貴方は。せつかく人が選り分けた書類を散らかして！ だいたいこの場所は執務処理の場であつて猫と遊ぶ

場所ではありません。

遊ぶのは結構ですが、時と場所を考えて下さー

「すまない、レティが構つて欲しそうにしていたんだ。……つー

あ！ 今あたしのせいにしたわね、ダーリン。

「猫のせいにするとは、それでも魔界の王ですか」

そうよそうよー。

言つとくナビ、始めて妙な一オイを付けて帰つてきたのはダーリン
なんだからね、この浮氣者つー！

宰相さんに叱られたダーリンは、心なしかしょぼん…としてこ。
魔界で一番権力があるのはダーリンだけビ、一番偉いのはきっと宰
相さんだと思つ。

「貴女も邪魔するのなら出ていって貰います」

次に溜め息を付きながら、あたしを掴もつとする宰相わん。

やはり、そうきたか。だが、甘い！

宰相さんがその行動に出る」とは、最早あたしは予測済み！
猫特有のしなやかな体を駆使してスルリと身を避ける。

「…………」

田標を仕留め損ねた宰相さんは、再び手を伸ばし捕獲を試みるが、
スルリ。

いくら宰相さんと言えど、あたしの許可なくいきなり抱っこして呪いのはダーリンだけです。

繰り出される不埒な手を、右に左に時には股下くぐり抜け、避ける避ける避ける！

あ、ちよっと楽しくなつてしまつた。

逃げ込んだ調度品の間をすり抜け、再び宰相さんの手の届く範囲にわざと身を晒す。

さあー、次はどり出るんですか、宰相さん。

「俺に仕事をじりと言いながら、お前はレディと遊んでいるのか」

「大変不本意ですが、遊んでいると言つよつ、遊ばれているような気がします」

じつじつと距離を詰めてくる宰相さん。この人、結構負けず嫌いか も知れない。

あたしも接近してくる宰相さんに備えて、身を低くしつつでも逃げれるように足に力を込める。

「……レディ」

宰相さんとの攻防を終らせたのは、鶴の一聲ならぬ、ダーリンの一 声。

低くて迫力のある声は、あたし達を静止させるのに十分な威力を持 つていてる。

あたしを見ながらトントンと机を叩く。

来いつてことね、これは。

もちろん行きます。

貞淑な妻（予定）は普段は夫（予定）に従うものですから。

「にや」と返事をしながら、ダーリンの側におすわり。

満足気に細められる闇色の目。つっすらと笑みをかたどる薄い唇。

間近で見たダーリンの微笑。

とつても眼福な光景に、思わず喉がゴロゴロなる。

視界の端には納得いかないとばかりの表情の宰相さん。

あたしに向かつて伸ばされるダーリンの手。だがその手のニオイを嗅ぐと、脱線に脱線を重ねたが全ての事の発端を思い出した。

ふんふんふんふん、ふんふん……

あたしの様子に気が付いたのは宰相さんだった。

「……ああ、ひょっとして匂いが気になつていいのでは？」

その通りです。このニオイいつたい何？

「匂い？」

「獣は匂いに敏感ですからね。例えば他の動物に触つただとか、ありませんか？」

「そういえば、ロッテに触つた」
ゆっくり立ち上がるダーリン。

「……どうへ？」

「休憩だ」

有無を言わさぬ口調で言い放つ。

こつなるとダーリンは誰にも止められない。

宰相さんもそれを解つてるので、あっさりと引き下がつた。

扉まで進むと、いきなりの展開について来れずに、机の上におすわりしたままのあたしを見詰める。

あ、ついて来いつてことね。

もちろん行きます。

貞淑な妻（予定）は、…以下略。

小屋ぐらいの、黒い大きな生き物がいる。

初めて訪れる魔王城の城門前にそれは、いた。

ダーリンの猫になつて、それなりの時間が過ぎたあたしだけれど、行動範囲は驚くほど狭い。

ダーリンの寝室、謁見の間、執務室。この三部屋とそれをつなぐ廊下の一角でたまにお昼寝。それが今のあたしの世界だつた。

そのどれもが限られた者しか出入りしない場所ばかりで、あたしは安全な猫ライフを送るためにも、その限られた区域を出ることはなかつたのだ。

ダーリンが一緒とはいえ、不安はある。

そんな矢先に、例の大きい生き物と遭遇したのである。

いや、遭遇というのはおかしい。ダーリンの目的は初めから、この

巨大生物だったのだ。

それは、分厚い金属でできた門を護るように、巨体を横たえている。山のような大きなそれが、生き物だと判断できたのは、呼吸音と共にゅつくりと上下する背中と、ダーリンの身体から臭つた二オイとこの巨大生物から同じ二オイがしたからだ。

ダーリンに気付いた巨大生物がギョロリと六つの目を向ける。

……六つ？

あたしがその事実を理解する前に、六つの視線があたしを捉えた。全身鎧びた鎧のようにギッと動かなくなる。

昔、本で読んだ事がある。

下手な魔術や刃物を跳ね返す、光沢をもつ黒い毛並み。荒い気性と非常に強い繩張り意識を持ち、許可無く足を踏み入れた者をその鋭い牙で容赦なく引き裂いたといつ、三つ子の首をもつ狼。地上では大昔に絶滅したといわれてる。

おおお、魔王様にくつついて魔界で生き残つてたわけですね。で、その魔王様の愛犬はケルベロスですか。さすがです。でも、正直怖いんです。近付けさせないでー！

頭の中でぐるぐると考えが駆け巡る。

後になつて思い出せば、三つ子の目に好意の光が氣がしないでもない。

だが、いかんせん、姿が不味かつた。

あたしを一飲みできる大きな口。しかも三つ。

鋭く並んだ大きな牙。しかも三つ。

あたしを簡単にペチャンコでやるがつとい前足。されば一足。

脳裏に甦るのは、田獣に追い回され命からがら逃げ延びた日々。逃げ込んだ先にも、無慈悲に迫り来る牙。

大型の猛兽魔兽が闊歩する魔の森で、あたしとしげ存在は食物連鎖の中では最下層に位置するという厳しい現実を、嫌というほど思い知つたのだ。

眼前に迫る巨大な犬の顔。

鼻息だけで体中の毛がそよぐ

恐らく舐めようと開けられた口の中に、鋭く存在を主張する牙を見付けて、あたしはどうどう恐慌状態に陥ってしまった。

気づけば形振り構わず駆け出してしまっていた。許容範囲を超える生き物との対峙に、考えるよりも身体が勝手に動く。つまり、あたしはあたしよりも遙かに巨大な身体を持つ獣に対して、自分の自覚している以上に恐怖心を抱いていたのである。このときのあたしは、ただひたすら遠くに、この場から逃げる事がしか考えていなかつた。

以上が事の顛末である。

お迎えは静かにお願いします。

逃げ込んだ森のつりの中で、あたしはひつそりと息を潜める。
相変わらず雨は止まない。

本当なら今すぐ来た道を戻りたいのだが、いつも雨ばかりでは身体が
冷え込んで満足に動くことも出来ない。何より濡れるのは嫌だ。
大人しく助けを待つ事にする。

ちゃんと探してくれてるよね。……ダーリン。

ほんのちよつぴり、不安になる。
すっかりあたしの事を忘れたダーリンの中では、あたしは相変わら
ずペツトのままだ。それなりに大切にされてる気はする。
けれど、ペツトはペツトだ。

探すほど愛着が無いかも知れない。

始めから、そんなに興味が無いかも知れない。

孤独に晒されて、負の感情がじわりじわりと頭の中を侵食する。

何であたしの事、忘れちゃったの……？

あたしと過ごした日々は忘れてても良いよつな記憶だった？

そりやあ、魔王様だもんね！

得体の知れない女との関係なんて、尊い王様には汚点にしかならな

いよね！

酷いよ、そんなの嫌あ。

あたしのこと、忘れないで……

きゅつと田を瞑る。

丸まる猫の身体。今は自分の温もりしか感じない。

「！」

地面にくつ付けているお腹からビリビリと震動が伝わってくる。初めは細かく震えるだけだった地面はやがて地響きとなり、大地を強く振動させる。

……近付いてくる！

身を固くする。

逃げる隙は無い。

出来るだけ息を潜めて、見付からないように通り過ぎしかない。周りの雑草を踏みあらしながら、姿を現したのはツチアラシと呼ばれる魔物の大軍だつた。血の気が引く。

猪のような姿の魔物だが、身体は一回りほど大きいし、牙だつて大きい。顔を覆う毛はなく、代わりにゴツゴツとした皮膚が剥き出しになつてゐる。ひとたび走りだせば、木だらうが岩だらうが人だらうが、前に立ち塞がるものを薙ぎ倒し、砕きながら走り通す。

「コフーっ、コフーっ」と荒い鼻息が耳に付く。

「おおい、猫いたかあ！？」

野太い威勢の良い声に、思わず身体が飛び上がりそうになる。

「いえ！ どこにも見当たりません。もう少し手前の方でしようか

それに答えて、別の声が響いた。

驚いた。

ツチアラシの上には誰かが乗つていたのだ。

どうやら一頭一頭に騎乗しているらしい。ツチアラシしか目に入つ

てなかつたし、見上げるにもツチアラシが大きすぎて気付かなかつた。

殆どの者が「猫ー」と叫びながら周りの探索を開始する。幸か不幸か、ツチアラシに乗る彼らの田線は、木と地面の小さな隙間に隠れるあたしを見付ける事は出来なかつた。

「猫ー！ つてどんなやつだっけ？」

「蜂蜜の毛皮だつてよ」

「蜂蜜？ なんか甘くて美味そつだな。種類がクインビーなら最高だなつ」

「馬鹿つ、陛下が大つ変に可愛がつてんだよ。食つたら殺される所の騒ぎじゃねえよ」

「じゃ、愛玩動物ー！ 出てこーーー！」

「非常食ーーー！」

誰だ今、非常食つて言つたやつー

それにもしても、もしかしてあたしを探してる？

出でていこつか、どうしようか悩んでると、ツチアラシの血走った目がギラコと「こちらを向いた。

ひええつー！ こいつみたー？

「ブヒツブヒユヒユツ」

騒ぐツチアラシを騎乗している誰かが、鬱を軽く叩いて宥める。しばらく興奮していたツチアラシも、構つて貰えないと理解したのか大人しくなった。

ただし、視線はこちらを向いたままだ。

「少し戻るぞーー。」

再び来たときと同じように地響きを立てて、来た道を戻つて行つた。せっかく迎えらしきものが来たのだが……

む、無理……！　あれは無理いい！

じつとあたしを見ていたツチアラシ。

あの日は絶対あたしを食べる気満々だ。ノコノ口出でいつたら絶対にぱくりと食べられる、そんな気がする！……非常食ですか。あたしの中に、追い掛けるという選択肢は綺麗さっぱりと消え去つていた。

でも、陛下つて言つてた。ダーリンのことだよね？

ちょつとはあたし、自惚れてもいいかなあ？

探してくれてた！　その事実がじんわりと暖かく胸に染まる。ちょつと迎えがアレだけ……

沈んでいた気分があつさり浮上した。

我ながら結構単純な猫かも知れない、と思つたあたしでした。

一難去つて、また一難。

毛並みを逆らつて舐められるような奇妙な感覚に、背中の毛がぶわ
りと逆立つ。悪寒が走る。

それは勘。ただの予感だ。

しかし、幼い頃から戦場に身を置いた者としては、時としてその勘
は予知にも等しい効果を發揮する事をあたしは知っている。生きと
死ける者全てに、等しく備わる生存本能だ。

落ち着かない妙な感覚に苛まれる中、あたしのヒゲが反応した。
ザアザアと雨が葉を打つ音に紛れ、確かに何かが近付く気配を感じ
たのだ。

何かは分からない。

耳を澄ます。何かが近付くような怪しい物音はしない。

けれど、あたしのヒゲは確かに異変を感じとったのだ。

猫になつて一番有難かつたのは、あたしの両頬に生えたヒゲの存在
だ。

このヒゲ、かなり高性能。

微細な空気の振動を察知して、いち早くあたしに伝えてくれる。相
手が音を消して忍んでくる場合に効果を發揮するのだ。

ただし、湿度の多い場合はとんと性能が落ちる。今の状況はまさに
ソレだ。

頼りのあたしのヒゲは、雨で湿気が多くて上手く空気の振動を掴め
ないのだ。

初めは勘違いかと思ったが、身震いするような悪寒とヒゲによつて、
あたしは確信した。音も無く近付く何かは、速度はかなり遅いが、
真っ直ぐにこいつらを田指してくる事を。

……これは、まさかあたし、狙われてるんじゃないですかね？
食べられる覚悟でお迎えの前に出た方が良かつたかしい。

逃げ場のない木のつるに留まるのは危険かも知れない。

少し考えて、つるの中から這い出る。

頭の中で逃げ道の順序を組み立てながら、何気無く何かが来るらしい方向を見て、全身の毛が一斉に逆立つた。

ぶよぶよのドロドロとした、粘液の塊のような物体が視界に映る。成人した肥満の男性が脳裏に甦る。うん、丁度それくらいの大きさだ。

これも無理いいいつ！！

踵を返しあたしは猛烈な速度で森の中を駆け抜ける。あたしは見た。

ゼリー状の体の中についた、 “食べかす” を。

白い剥き出しになつた恐らく骨にドロドロに溶かされた恐らく肉。

捕まれば、最後。

あたしの無惨な末路がそこにあつた。猫の視力ははつても良いのです。

い、ここまでくれば、大丈夫よね……

幸運な事に、ノロノロとした移動速度のドロドロはあつとこつ間に見えなくなつた。

鬱蒼と茂る草に身を隠しながら辺りを伺う。

乱れた息を整えながら、見つけた大きい葉っぱの下で雨宿りする事にした。

辺りに危険はない。

さらに幸運な事に、吹き荒れる雨が他の獣からあたしの気配を巧く隠してくれたらしい。

ホツと息を付いたのも束の間、しばらくして再びあたしのヒゲが異変を訴えた。

お馴染みの悪寒とヒゲの反応。ゆっくりとした速度で、物音を立て

ずに移動するソレ。

この反応には覚えがある。

わざわざのドロドローー

慌ててその場を離れる。

再び危険の有無を確認して息をついたら、またヒゲが異変を訴える。その後もあたしがどんなに逃げても、ドロドロは遅い速度で確実に追いかけてきたのである。

そろそろ限界に近い。

ずっと逃げて走ったばかりの身体は、あちこち痛いし、だるくて重い。

なにより精神的な疲弊が激しかった。

逃げても逃げても追いかけくるドロドロに、あたしは成す術もなく体力だけが削られていった。

思えば、他の獣に遭遇することは無かったのは、もしかしてこのドロドロから隠れていいるのかも知れない。

あたしは考えを巡らせる。

今は木の上で休息中である。

よく考えれば、今まであたしは地面に近い場所ばかりに隠れていた。ドロドロはいつもズルズルと静かに地面に這うように進む。

ひょっとすれば、高い場所は大丈夫かも知れない。

そんな一縷の望みに縋るように木に登つたのだ。

この木の上が、あたしの最後の砦だ。

ぴぴっとヒゲが反応する。

ごくつ、と喉を鳴らす。

来た！

這いつよひに進むゾロゾロせ、音も立てずに真つ直ぐにひかひを田端す。

上からだとよく分かる。

草を踏みつけたり押し退けているのではなく、すり抜けているのだ。一度ゼリー状の体に取り込んで、そのまま移動して、そのままの状態で身体から吐き出す。

だから音が聞こえないのね。

距離があるからか、冷静に観察できた。

あたしの場合はそのまま取り込んで、せつと吐かれないに違いない。

ゆうべり近付くゾロゾロせ、あたしのいる木の下で動きを止めた。しばらく周辺をうろついた後で迷い。

その後の様子にあたしはホッと息を付いた。

やつぱり高い所は駄目みたい。

けれども、このままゾロゾロが去っていくないと、あたしは動く事は出来ない。さて、どうしたものか、と思案しつつ体力回復に専念する事にした。

んん？

にゅーー、と触手のようなものが視界の端を過る。

ギョシッとじっと慌ててゾロゾロを見ると、細く長く体を変化させてしまつと高度を上げ、あたしに接近してきたのだ。

「シャーッシャーッ」と牙を見せてドロドロ触手を威嚇する。

あたしは出来るだけ身体を低くし、じりじりと後退する。このまま近くの木に飛び移り逃げる予定だ。

不意にガクンと体勢を崩す。

後ろ足に、ねつとりとした感触。

ドロドロ触手が絡んでいた。

しまった、前のドロドロ触手は困だつたんだ！

爪を立てて、必死に木にしがみつく。
引きづり降ろされたら、最後だ。

無惨な末路はすでに見た。

あんなのになりたくない、絶対に！

「に、ー！　に、ー！」

あたしの声で他の魔獣が集まろうが、この際何でも良い。
この状況から逃れられるのなら、何だっていい。
あらんかぎりの声を振り絞つて、助けを呼ぶ。

助けて、助けて！　師匠！　姫様！　誰か、助けて、ダーリン！！

グアア、ア、アルルル！！

突如聞こえた獣の咆哮。

雨で湿氣る空気を切り裂くように、喉の奥から放たれるそれは聞くものの戦意を根こそぎ奪う威力を持っていた。あたしが失意の底に叩き込まれ無かつたのは、触手に意識が行つてしまつていたからだ。

下で「ぶちゅつ」と何かが潰れるような鈍い音が聞こえた。足の束縛が無くなり、枝の上に身体が安定する。安心したのも束の間、大きな身体の何がが、軽々とあたしがいる木の枝まで飛び乗つたのだ。

見事な跳躍をしてみせたのは、虎によく似た魔獸だ。逞しい四肢に立派な赤褐色の毛並み。虎によく似た顔に、鋭い牙。そして額にはもつ一つ、目が開いていた。

「ふ、フウーーっ」

新たな敵の登場に全身の毛を逆立てて、あたしは少しでも身体を大きく見せる。

今すぐ逃げたい。
けど、きつと逃げられない。

矛盾した気持ちに恐慌状態に陥りかけたあたしだが、すぐに頭の中が真つ白になってしまった。

圧倒的な力の差に、すっかり氣の動転したあたしは、うつかり足を滑らせ木から落ちてしまったのだ。

「みいい……」

あまりの衝撃に思わず呻いてしまつ。びろーん、と首の皮が引っ張られる感覚。それと同時にあたしの身体が地面に浮いた。

何とあたしは、虎モドキにパクッと首根っこを食わえられていたのだ。

ぶらぶらと揺れる、あたしの身体。

相変わらず雨に身体は濡れているが、何故か妙な安心感に包まれ、身体の力が自然と抜けてしまった。

端から見れば、親虎が虎の仔を運んでいるかのように見えることだろ。微笑ましい光景だ。癒される。

いやいや、騙されないであたし！

あいつと巣に持ち帰つて食べる気なんだから！

「ニー！ ニー！」と暴れまくるあたしを我に返らせたのは、予想もしない声だった。

『食わねえつの』

『一・?』

もいもいと何かくわえているかのよつな、ぐべもつた声に抵抗を止め。

虎さん、今、喋りましたか？

虎さんと仔虎サイズ

「絶対に、貴女に好意を抱いているのよ」

鏡に映る少女は悪戯っぽく笑う。

流れる水よりも澄んだ印象を受ける銀色の髪。

その艶やかな髪に櫛を入れながら女もまた笑った。

「まあ、姫様。侍女たちの語る恋物語の聞きすぎですわ。あた……、私のような一介の侍女よりも殿方の興味は、日に日に美しくお成りにあそばせる姫様にこそ向いているのですよ」

「私の前ではそんなに堅苦しく話さないで、ね。……私は丞先を向けようとしても駄目よ？　あの人は今まで少し怖い雰囲気の人だつたけれど、貴女に話すようになつてからは、とっても素敵な人になつたわ」

女は鏡に映る自分と目が合つ。

干した藁のような色の髪は、手入れこそ欠かさないが、取り立てて称賛されるような綺麗な色でもない。

特別目の引く美人でもない、可もなく不可も無いごく平凡な顔。

鏡越しに、少女と目が合つ。

好奇心に煌めく青い瞳は、さながら研磨された至宝よりも美しい珍しい高貴溢れる銀色の髪。瑞々しい果実のような唇。

女は思う。

鏡に映る少女にこそ、主役に相応しい。

「だーかーら、それは恋物語の聞きすぎつ、です！　彼女たちの夢が詰まつたお話は色々と非現実的なんです。姫様みたいな美人ならともかく、あたしが、」

「笑うと、とても美人だわ。それに時々すゞしく、艶っぽい」

「つ、つや？！　どこのそんな言葉を覚えたんですか！」

「本当に。時々ゾクツて背中がなるわ」

「ああ、それは多分……、あたしの魔力に当たられたから、かもしけない。」

女はそう思つたが、口にはしない。口にしたといひで、夢をみる女の目を醒まることは出来やしない。

ならば、そのまま醒めない夢を見続ける方が幸せだろつ。ただ、その恋物語の役者が台本通りに動くかは約束しかねるが。

有り得ない、し、あつてはいけない。

誰か一人を懇意にするなど。

あたしは誰にも囚われたりは、しない。

「み、にゅー」

あたたかい。

沈んでいたあたしの意識がゆっくつと浮上する。

『可哀想に、まだ目も開いてない、……でしょ？』

「集落で……のか？」

すぐ近くで聞こえる会話に、あたしの耳がピクピクと反応した。
なんだか久し振りに昔の夢をみた気がする。

『それが、どの家の子でも無いみたいで。……困ったわ』

「それなら俺が面倒見る。もともと俺が見つけたんだしょ」

『あらやだ。散々手を焼いてくれたやんちゃ坊主が、そんなこと言うなんて、大人になつたのねえ。でもその子、女の子よ。女の子はみんな纖細なのに、がさつなあんたに面倒見られるかしら』

「はあ～？ 皆？ 一部は除くんじゃねえの？」

『言つたわね、あんた。まあ、良いわ。困つた事があつたら言ひに来なさい。

……あら、まあまあ！ 田が覚めたのね、大丈夫？ 怖かつたでしょ』

うつすらと田が開いたあたしに気が付いた声の一人が、あやすように絶妙な力加減で優しく撫でてくれた。

口調から推測するに、きっと女人の人だ。

全身が暖かいふかふかの何かに包まれている感触。人肌のそれは、とんでもなく気持ち良くて安心できる。

心地好い微睡みの中で、あたしは暖かい何か頬を寄せる。

『あらあら、くすぐつたいわ。……やっぱり私が面倒見よつかしら。女の子、欲しかったのよねえ』

「俺が面倒見るって言つてんだろうが。……おい、田が覚めたか。名

前は何てこ'つ?」

あたしを見下ろすのは、見たことも無い赤毛の男だ。気の強そうな眉に力強い眼光。鍛えられた体は兵士と言つよりは、健康的な褐色の肌に相まって、どこかの街のガキ大将のような印象を受ける。

はて? いの人にいかで会つたよ'うな……

何か引っ掛かるような疑問を頭の隅に追いやしながら、無駄だと思いつつあたしは名乗る。

『レディ』

にゃん言葉、頑張つて訳して下さい。

本当の名前を名乗ろうかと思つたが、魔界でのあたしの名前はレディだ。

ダーリンもあたしを探してくれてゐし、それならお迎えに来やすいように名前は変えるべきじやないと判断したからだ。

うん、あたし森で迷子になつちやつたのよ、確か。

そこまで思ひ出すると、急速に頭が働きだす。

そして、ドロドロに襲われて、食べられそうになつた所にふと、あたしを包むふかふかに田を向ける。

三つの田とパツチリ田が合'う。

あたしの全身はピシリと硬直した。

『遠慮しなくて良いのよ、母親だと思つて甘えて頂戴、レディ』

ペロリとあたしを舐めるのは、あたしを助けた虎さんにそつくつの

虎さんでした。

えええええ？

……ちょっと頭を整理する時間を下さい。

あたしが三ツ目の虎さんの集落に保護されてから、数日がたつた。この虎さん、魔界ではヴェルガーといつ種族らしい。

虎に良く似た外見と、額に魔眼と呼ばれる三つ目の瞳を持っている。体毛には電気が貯まりやすいらしく、体内に電気を貯める電気袋があるらしい。

あたしがお世話をなつてるのは、その集落の姉弟、エメリとガウディ。

ガウディはあたしを助けてくれた恩人もとい、恩虎、いや恩ヴェルガーだ。

同じ猫科（？）だからか、あたしのにゃん言葉もしつかりと理解してくれている。

基本的にはガウディに面倒を見てもらつてているあたしだが、集落の周辺を見回る役割を持つてているガウディ出かけるときにはエメリの所に預けられる。

その見回りの時に「にーにー」鳴いていたあたしを発見したというのが、事の真相だった。

働かざる者、食づべからず。

そななあたしのお仕事は、エメリの子供たちの面倒を見る事だ。

ボワボワの毛皮にあたしより少し大きい身体の四ツ子ちゃんたちは、観ている分には愛くるしいが実際に面倒見るとなると、これまたかなり大変。

『れでい、あそんで』

『あそんであそんで』

舌つ足らずのおねだりは最高に可愛ひ満点だが、全匹わんぱく坊主ばかりだ。

一匹が飛び掛かつてくると、もう一匹、また一匹と狭い部屋の中で縛れるようにしてじゅれ合つ。

コロコロ転がつたり、追いかけたりの激しい全身運動に、魔王城ではほぼ一日寝てばかりだったあたしは、あつとこゝ間に全身が筋肉痛になつてしまつた。……歩く度にギシギシ痛い。

天気が良ければ、外でも遊ぶのだがあいにくの嵐続き。

ガウディいわく、雨の日には例のドロドロが活発になり、増殖を繰り返しながら個体数が増えるので、とても危険ならしい。……確かに物凄く危険でした。

「外に出んなよ」と口を酸つぱくして注意されている。もちろん出ませんとも。

たっぷりと遊んだあとが、みんな木の弦で編んだ籠ベッドでお風呂の時間だ。

こうなるとわんぱく坊主もじゅりへは田を覚まわないので、その間はあたしも一緒に休む。

籠ベッドにぎゅうぎゅう詰まつた仔虎の隙間に、身を滑り込ませてあたしもお風呂。

「レティがうちの仔の面倒見てくれてるみたいで、ホント助かるわ。

最近雨続きで退屈なつづいてたのよ

『ん、雨どいの風だよな。……陸下の機嫌が悪いんだうつな。なんか向ひがあったのか?』

「さあね、長なら何か知ってるかも知れないけれど

うとうとしていると二人が帰つて来たらしい。

エネリが人型をとつていて、ガウディが虎さんになつていてる。

初めに見たときは逆のパターンだ。

人型のエネリは、これまた赤毛のグラマス美女だ。野性味溢れる妖艶さがまた堪らない。キュッと締まつたお尻なんて、女のあたしでも「ゴクリと唾を呑み込む色っぽさだ。

『ん、まあ、まあ?』

『にいにのにおいもする』

『ねみゅい』

もそもそと覚醒しだす仔虎たち。

みんな思い思いに伸びたり欠伸したりするので、籠ベッドの中で寝ていたあたしも足が当たつたり尻尾が当たつたりと、もみくちゃにされる。

『帰るぞ、レディ』

『うー、まだ眠たい』

眠気まなこで渋つていると、パクつと首根っこをくわえられる。

ヴェルガーの集落は巨大な岩場の中を大胆にくり貫かれて出来ている。

エネリの巣穴とガウディの巣穴は姉弟だけあつて虎穴の中では繋がっているから、あたしが歩いても別に危険は無いのだが、何故だかいつもくわえられる。

『うふうとうとうひつじ、あたし自分で歩けるわ』

「ララララ揺れながら抗議を囁えるも聞き入れられた事はない。

『まだ、田も開いてねえ子供が遠慮なんかすんな』

あつといつ聞にガウディの巣穴に到着した。

べるべるんと舐められ、あたしの蜂蜜色の毛並みが綺麗にされる。

身体を舐め回されるなんて、ダーリンにもされた事無いのこーー！

いつもいつもわれっぱなしのあたしだが、今日やは断固拒否しなければ！ ダーリンに会わせる顔が無い。

『じ、自分でできるひてば！ あたし田ならパツチリ開いてるでしょ』

『何言つてんだ、思いつきり閉じたまんまだろ？』

再びべるんと額を舐められる。

ん？

……何だかものす』ーー、嫌な予感がする。

一つの可能性にぶち当たってしまったあたしは、しどりもじりじガウディに聞いてみた。

『あのう、それは皆さんの額に開いてる第三の田の事でしょうかね

?
』

『おひ。 いるんだよなあ、 たまに。 田も開いて無いのに妙にませて
る大人ぶつてる奴が』

……一生、 開く予定はございません。

やつぱり五月蠅いお迎え

ヴエルガーの子供に間違えられました。

なんてこつた。

生まれてこのかた、順調に育つてきたあたし。

急激はホーリンでと育て場所も無かったけれど、成人してから「は子どもに見られた事は無かったあたしは、その可能性に気付くのに時間がかかってしまった。

そりやあ、たくさん食べ物おねだりしましたよ？

そりやあ、仔虎ちやん達と一緒に籠べでしが出でましたよ。

そりゃあ、寝ぼけてエメリに擦り寄りながら、ゴロゴロしこなに行っちゃいましたよ？

思いっきり間違えられるよ それ！
穴があつたら入りたーーいーー！

恥ずかしさに身悶えてたあたしだけれど、それ以上に憐れだつたのがガウディだつた。

『えつ、スマン？ えつ、いやつ、えつ、えつ？ いやつ、俺そん
なつもりは！』

と、言いながら座りながら後退。あたしと距離を取った。器用ですね。

可哀想なぐらい慌てながら弁解してくれた。

本来、ヴェルガーに問わず獸が獸をべろんべろん舐め回す行為はよっぽど親しい相手にしかしない。それこそ、家族とか伴侶とか。そうとは知らずに成人女性にべろんべろんとしてくれました。

まったく、もう！

でも、心配してくれて面倒見てくれて、文字通り猫可愛がりしてくれた訳だし。

うむ。この際、目を瞑ろつ。

あたしが成人してる事と猫という種族だという事が知られても、生活にそんなに変化は無かった。

ガウディとエメリは、あたしを子ヴェルガーだと思つて保護してくれた訳で、もしかすると放り出されるかも！ と戦々恐々としていたのだが、そんな心配も杞憂に終わつた。

あんなに良くしてくれた恩ヴェルガーさん達に、少しでも不信を抱いたあたしが恥ずかしい。

変わつた事といえば、成猫と知られた日を境に、あたしはエメリの巣穴で仔虎ちゃんと一緒に寝ることになった。……エメリは「娘が増えたわ！」と凄く喜んだが、恩ヴェルガーには何も言つまい。

唯一の不満は、ダーリンに会えない事ぐらいだ。

普段は思い出し、ため息つく暇もない。

仔虎ちゃん達とお留守番という充実した日々を送るあたしは何かと忙しい。体力も使う。

けれど、ふとした時に考えてしまう。

仔虎ちゃん達は散々暴れ回ったあと、ゼンマイの切れた玩具の様にぐつすりと眠つて動かなくなる。

そんなとき、唐突に出来てしまつのだ。

誰にも邪魔される事のない時間。
あたしだけの時間。

乱れた毛並みを整える。
ペタリと床に寝そべる。冷たい床は、お世話で火照った身体によく
うど良い。
ぽっかり空いた空虚の時間。

背中がさみしい。

いつも不器用にも撫でてくれる手が無いこと、悲しくなるのだ。
どうしようもなく。

ダーリンに会いたいなあ

でも、いない。ここには、ダーリンもあたしのダーリンはいない。

この世界にあたしは独り。

そんな錯覚にブルツと身を震わせ、暖かさを求めてぎゅうぎゅうに詰まつた籠ベッドにあたしも身を寄せるのだった。

変化は訪れる。

今日も仔虎ちゃんの面倒を見たあたしは、くたくたになつて集団で

籠ベッドで寝ていた時だ。

エメリでも無く、ガウディでもない。

知らない気配にあたしの意識は一瞬で覚醒する。

仔虎ちゃん達に埋もれた体勢のまま、あたしの身体が緊張した。

「ただいま、帰ったよ」

知らない声。

「うふふ、お帰りなさい」

顔を上げずに感覚だけで辺りを探っていたあたしは、その後から聞こえたエメリの声に緊張を解く。

エメリの声はいつに無く柔らかい。

端切れの音が静かな空間に響く。会話が途切れる。とても甘い雰囲気だ。

何をしているかは野暮なので、様子を探らない。

大丈夫、この人は敵じゃない。

害は無いと判断したあたしは、再び寝入る事に決めた。

「ずいぶんと休暇が遅れたのね。私、忘れられたかと思つたわ

「僕が君と子供達の事を忘れるはずないよ！……実はこうして帰つてこられたのも仕事だからなんだ。城では随分大変な事になつてゐる

「あらやだ、そんなに？……大丈夫なの？」

「いつもして君の顔と子供たちの顔を見るくらい、目を瞑ってくれる

優しい沈黙が支配する。

「……陛下がそんなに無茶をなさるなんて、驚いたわ」

「いや、陛下は何も仰らないよ。ただ、知つての通り嵐だからね。天気が陛下の御心を現してゐるから、周りが何とかしようと奔走してゐるわけ」

「ふうん。あなたは私と違つて、弱つちいから無茶しちゃ嫌よ?」

「酷いね、引き際ぐらいい心得てるわ。わあてー、僕の可憐い子供たちはみんな大きくなつたかな」

ひょいっと、ひらりと覗き込む気配。

一瞬の沈黙。

後、しきりに何か数える気配。

ゴクリと喉がなる音が聞こえた。

「うふ? ……ハ、エネリ? 何だか一匹増えてないかい? ? ? ?

「わうなの。待望の女の子よー。可愛いでしょ? ? ? ?

「へ、へえ? ……いつ、いつ、色つて、蜂蜜の毛並みつて、言つんだよね? ?

「せうとも言つてからじり? ?

「……こつからウチに? ?

「最近よ。ガウディが森で助けたのよ。迷子みたいなんだけど、この辺りの子じゃないみたいで、ウチで面倒みてるのよ。あ、この子このサイズで大人なのよ。驚いたわ、猫っていう地上の種族なんですよ！」

「ねねね、猫おーー？」

狼狽した様子に、あつという間にまつたりとした雰囲気がぶち壊された。

……つるさい。

あたしはムクッと起き上がり、パツチリ目を開く。

薄い茶色の瞳と目が合う。

ボサボサとした纏まりがない茶色の髪に、仕立ての良い服。ヴエルガーの皆さんには露出度の高い服ばかりなので、身体を殆どを服で覆う男は新鮮に見えた。魔王城、というか一般的にはこれが普通だけれど。

あたしにとつては久々に見る、せつかくの一般的なのに、服に着られている感が凄く強いので残念な感じだ。

ヒヨロツと背が高いだけに、無駄にひ弱な印象も受けれる。

「み、縁……。た、大変だ……！」

どこか野暮つた雰囲気の漂う男が、後退りながら巣穴を飛び出して行つた。

「どうしたのかしら？ あの人つたら」

『エネリ、今の誰?』

「私の、だんな!」

野性味溢れるセクシー虎女のエネリと、さつきのダサイ……、ごほん、氣弱そうで引きこもりみたいな人が!?

それでも、物凄くあまい雰囲気が漂っていたので、関係はすこぶる良好のようだ。

『……ふ、ふうん』

人の好みは、人それぞれ。
あたしは何も言つまい。

あ、でも馴れ初めぐらいは聞きたいかも!

好奇心が疼くが、エネリの様子をみていればわかる。
これは第三者、ガウディにでも聞いた方がいいと思う。
聞けば最後、寝かせてもらえない気がしたので、あたしは懸命に興味無い振りをした。

……あたしの勘はよく当たる。

翌日、ツチアラシが攻めてきた。
いや、やってきた。大漁に。

ヴェルガーの集落の周りにツチアラシの群れができた。
ツチアラシはとっても怖いけど、ヴェルガーの巣穴は大岩の高い位置にあり、奴らは中には入れない。まさしく高見の見物で暢気に構

えていたあたしだが、失念していた。

奴らの上に騎乗していた人達が数人、集落に入ってきたのである。ゆっくり観察できたのは、そこまでだ。今あたしは、それどころではない。

『にいざやああああー！』

バリバリと爪を立ててあたしは抵抗する。

「レディ、わまあ～？ 帰りまちゅよ～？」

エメリの旦那と格闘中のあたし。巣穴のすぐ外にはツチアラシの二オイをポンポンさせてる人が待機している。

あたしはすぐにポンときた。

あたしをツチアラシ集団に差し出すつもりね！

あれは駄目。絶対にイ・ヤ！ とあたしは抵抗する。

ツチアラシ怖い。大きい獸怖い！

迎えに来たのはわかるが、その迎えの人が安心できるかと考えて答
えは、否。

信用できない人と一緒にツチアラシの傍に近寄りたくない。乗るだ
なんて言語道断、あたしは断固拒否する。

喧嘩売つてんの？ その赤ちゃん言葉。

と、売り言葉を買えないくらい必死だ。

逃げて逃げて逃げまくること、とうとうエメリの旦那が籠ベッドの中であたしを捕まえたが、対してあたしは爪を立てて抵抗。

「大丈夫、大丈夫。怖いことなんて何もないでちゅよ～」

『いいやあああ！ つて、言って、る、でしょ！』

嫌がつてゐるのに、ことじとく無視。

抵抗も虚しく、籠ベッドに引っ掛けた爪を一本づつ剥がされていく。

グルルルル……

地の底から響くような唸り声が突如部屋に響く。

まるで背中に冷水でもかけられたように冷気が走った。背筋が凍る

といふのは、きっとこの事を言つんだろう。

旦那さんと仲良く一緒にビクウツと身体が跳ねた。

音の方向には、赤褐色の力強い毛並みを持つ大きな虎の魔獸。

「ガ、ガウディ……？ な、何でそんなに怒つてるんだい？」

ガウディは音も立てずに近くに寄ると、旦那さんの方に顔だけ向けて、いきなりクワツと牙を見せた。

思わずあたしから手を放す旦那さん。

ふー、助かった。

安堵するあたしはガウディにパクつと首根っこをくわえられ、そのまま虎の子よろしく運ばれていった。

『大丈夫か？』

『ありがとー。た、助かつたかも』

首から下の身体をぶらぶら揺らしながら、あたしはガウディの巣穴に避難した。

巣穴同士が直接中で繋がっているから、外に待機していたツチアラシライダーの皆さんにも鉢合わせない。最適な避難場所だ。

ぼすつと下に降ろされたあたしは、次に労るよつて身体を舐められる。

うーん、見事なまでの子ども扱い。

成猫とバレた後も表面上は大人扱いしてくれるガウディだが、こうした所々にまるで子どもと接するかの様な態度が現れる。なにくれと構つてくれた理由を聞けば、初めは通常のウェルガーの子どもに比べて、ひ弱な体型のあたしを心配してくれての事だったらしい。

それはそれは。

確かに大きさこそ、それほど変わりはないが、仔虎ちゃんとあたしの足を見比べてみれば、その差は一目瞭然だ。

仔虎ちゃんの足はしつかりとした骨太な足だ。対してあたしの足は小さく、仔虎ちゃんの半分の太さしかない。

これは成長後の大きさの差に関係しているのだろう。

残念ながら、どうあがいてもあたしはこの大きさが限界で、仔虎ちゃん達は今後によきによき大きくなるに違いない。

『つたく、いきなり何だつてんだアイツ』

アイツとはきっとエメリの旦那さんの事だろ？

思いきりあたしを子ども扱いどころか赤ちゃん扱いしたエメリの旦那さん。許すまじ。

けれど、今はツチアラシの恐怖の方が強い。

『いづちに来たりしない……？』

『それはない、例えエメリの番^{つがい}であってもここは俺の場所だ。エメリならともかく許可無く入るとどうなるか、ヴエルガージャなくても分かる常識だろ』

やはり虎の魔獣なだけに、ものすごく繩張り意識が強いのだろうか？首を傾げていると、苦笑いしながらガウディが教えてくれた。

『もともと俺らの種族は魔界にバラバラに散つて生活してたんだよ。集落ができたのはつい最近。あんまり他者を受け入れることには慣れてない。

それが集団で生活するようになつたんだ。そのときに定められた暗黙のルールが、他人の巣穴には絶対に入らない』

『入つたらどうなるの？』

ガウディが牙を剥き出しにして笑う。牙と共に野生の本能が剥き出しにされた壯絶な笑み。

『死だ』

あたしにも、おswり後退が出来ました。

『おいおい、そんなにペペんなよ』

いたいけなニヤンコをあまり驚かさないで欲しい。
思わず隅っこで縮こまつてしまつたあたしをガウディが尻尾で誘い
出す。

目の前で興味深い動きをするふたふたこ、あたしはたちまち虜にな
つてじやれつくな。

ああ、本能……

逃げるふさふさを追いかけて、あつという間に疲れてしまった。
対してガウディは余裕綽々。尻尾しか動かしてないから、それも当然か。

でも、やはり疑問が残る。

他者を受け入れ難いのならば、ヴェルガー同士でさえ入るのを躊躇
う巣穴にあたしを連れてきてくて、なおかつ面倒見てくれたのか。

『なんであたしを助けてくれたの?』

『ヴェルガーの子どもに見えた事は知ってるよな』

あたしは頷く。

さも当然の事のようにガウディは続ける。

『子どもは宝だろ?』

べろんと舐められる。

何だかまた、成猫なのを忘れられてる気がする。ビームでも、子ども扱いなあたしだった。

それに命が救われたのだから、もう文句は言つまい。

いい二オイがする。

ガウディの巣穴に籠るあたしの鼻先を掠めたのは、とんでもなく食欲そそる二オイだった。

いやいや、絶対に出ないわよ。

自分に言い聞かせるように頭を振る。

今は見回りに出たガウディに口を酸つぱくされて注意された。あたしさえ出なければ大丈夫、だそうだ。

『それでもね、もし、あたしが出なくとも、ガウディが留守の間に誰が入ってきたら……』

『誰かが入れば二オイですぐに分かる。絶対にソイツは逃がさない』

だ、そうです。

そう言ったガウディはやつぱり壮絶な笑顔でした。

頼もしい限りです。おわり後退！

そんなあたしに早くも危機が訪れた。
勘違いしないでほしい。

あたしは毎日たっぷりと「飯を食べさせてもらつていい。決してお腹が減つていい訳ではないのに、凄く美味しそうな二オイで口の中が涎でいっぱいになつてしまつた。ペロリと口を舐める。それくらい異常な、食欲そそる二オイなのだ。

気になつて気になつて、おちおち寝もできない。

見るだけなら、大丈夫よね？

チラツと確認したらすぐに引っ込む。よし、それで行こう。香しい二オイに惹かれ、巣穴からそつと顔を出す。恐る恐る周囲を見渡すと、二オイの正体は呆気ないほどすぐに判明した。

ドン・グラ！

魔界のお魚。あたしの大好物だ。いつだつたか、ネメシスが謁見の間での宣言通りあたしにお土産として献上してきたものだ。

ドン・グラだわ、わーい！

つて、ノコノコと誰が行くものか！

巣穴からほんの少し離れた場所に、これ見よがしに置かれたドン・グラ。あの香りは燻製に違いない。

豊潤にして濃厚でありながらも、舌先を擦る上品な味わい。一度食べたら癖になるあの魔性の歯ごたえ。

ご丁寧にも皿の上に、まるで食べててくれと言わんばかりに惜しげもなくその姿を晒して鎮座している。

切斷面が艶やかに輝く切り身の堂々たるその様は、威厳さえも感じ

わかる。

岷だ。岷に違いない。

ドン・グラに釣られて出ていつたら最後。
あたしがあのドン・グラを、まずははじめに二オイを楽しんで一思い
にパクッと口にして、切り身を口に含みながら舌先を転がして味わ
つて、切断部からまた旨味が染み出すドン・グラの燻製を噛んで
噛んでまた味わつて

.....

あたしとすることが。

焼いてよし、煮てよし、炙ってよし、生でもよしと二拍子ならぬ四
拍子揃つた高級食材の出現に動搖してしまったようだ。
とにかく食べている間に捕獲されるに違いない。

ひとつヒゲが反応する。

あたしが巣穴から姿を見せたことで、何者かが少し動いたらしく
やはり待ち伏せされている。

こんな子供騙しに引っ掛かるあたしではない。
巣穴へと身を引き返そうとして、足を止める。

それにも、堪らない二オイだ。食べたいなあ。

まあ、二オイくらいなら減るものでもないし、近づくわけでもない
し、少しくらい楽しんでも損はない。
せつかくなので、より二オイを楽しむ為に口を開じて鼻をすんすん
される。

あー、いー二オイ。

すんごく美味しいぞ。

食べたい、ドン・グラ食べたい。

食べたい、食べたい。

いい二オイ。

やつぱり食べたい。

食べたい、食べたい。

食べたい、食べたい、食べた

パクつ。

お~いし~い!

「それ、今だ!」

『!?

視界が真っ黒に覆われる。

二オイだけ二オイだけと言いつつ無意識のうちに近づいてしまった
あたしは、あっさり捕まってしまった。
なんたる失態。間抜け過ぎて言い訳もできない。

「ふー！ ふ、ふにー！」

ちやつかりドン・グラを食べ終わつたあたしは必死に暴れる。
なにか布の様な袋に詰められてしまつたらしい。
ゆつさゆつさと揺れる感覚に胸が気持ち悪くなつてくれる。

「大変……す！」

「はあ！？ 何考え……あの……！」

布越しに伝わる世界が何だか騒がしい。

「ふぎやー！」

「じじじとばかりに、暴れまくる。

痛つたい！？

お尻をぶつけて痛さに悶える。

いきなり袋ごと床に置かれた様だ。いや、あの衝撃は落とすに等しい。

信じられない。か弱い女性に対してなんという暴挙。

こつなつたら、絶対に引っ搔いてやる！

毛を逆立てながら、袋から這い出たあたしは思わず目を疑う。

一番、会いたかった人。

すぐ近くに佇む。

漆黒の髪と瞳を持つ、闇を纏う人。

あたしのダーリン。

あたしは駆け出す。

「二二やあん、二二やあん！」

ダーリン田掛けて一田散に駆け出す。

足にぶつかる様に身体を擦り寄せる。

しばらく周りをぐるぐる回った後、前足を上げて立ち上がる。

あたしの意図を理解してくれたダーリンは、すぐ二二しゃがんしてくれた。

「二二やあん、二二やあん」

端正な顔に頬を寄せて、今まで会えなかつた分も合わせて舐めまくる。

て、あれ？ ダーリンさつきから何にもしてくれないけど、そんなに心配してなかつたの？

ふと、気が付いたあたしは頬ずりを止めてダーリンを不安げに見詰める。

ダーリンは僅かに顔を緩ませて、優しく一撫でされた後、ひょいと抱き上げられた。

あ。

あたしが落ち着くのを待ってくれてたわけね。

余りにも冷静なダーリンの反応に、形振り構わず飛び出していったあたしは恥ずかしいと感じてしまう。

本音を言つならもう少し熱烈に喜んで欲しかった。

ダーリンが歩く度に、人垣が見事に割れて道が出来る。人混みの中から、真っ青な顔のエネリが飛び出してきた。

『エネリ、ありがとう。やっとお迎えが来たの』

「えつ？」

あたしがエネリにお礼を言つと、一瞬虚を付かれた様な表情をした。

「大丈夫だよ、エネリ。こっちへおいで。……失礼致しました、陛下」

エネリの旦那さんが優しくエネリを諭す。

ダーリンは特に気にした様子もなく、奥に用意されたふかふかの椅子に座つた。

両脇にはツチアラシライダーの皆さんがダーリンを守るように待機。わらわらと集まり膝を付くヴェルガーの皆さん。

息を切らして入ってきたガウディが、エネリに素早く取り抑えられ、姿勢を低くしたのが見えた。

ヴェルガーの集落広場が、あつという間に謁見の間みたいになつた。

「こ度は我らヴェルガー集落へようこそおいで下さつた」

ヴェルガーの真ん中にいる、一番大きな体の人が口を開くと、皆一

斎に頭を下げる。

「やう固くならずとも良い。今回の訪問はただの視察だ。紙面の報告だけでは全ての現状など到底理解出来るものではない。集落が出来てまだほんの十数年、だいぶと様になつてきたようだが、不自由はないか？」

「おかげさまで順調です。全ては陛下のお力添えあつてこそ。我ら一同、感謝しても仕切れぬほどでござります」

難しい話が始まってしまった。

思わず欠伸が出来てしまう。

ダーリンはあたしを迎えてくれたのではなく、どうやらもともと視察にきたらしい。

偶然に感謝しよう。

神様、ありがとうございます。

といつてもあたしの知っている神様は皆當てにならないけど。

生活状況や付近の様子、最近のヴェルガー誕生など難しい話をひとしきりし終わった後、ダーリンはふと思い出したかのよう、綺麗なリボンを取り出した。

ん、何？

うとうとしかけてあたしは瞬きを繰り返す。

田にも鮮やかな美しいリボンが、あたしに御披露田するかのよう広げられた。

これは、まさか！

眠気が綺麗さっぱり吹き飛ぶ。

ダーリンからのプレゼント！

興奮のあまりに椅子から降りたり登つたり、降りたり登つたりを繰り返す。

わあー、素敵！

青空のように染め上げられた光沢の布地に、金色の刺繡が施されている。真ん中には透明感のある紫色の石が付いており、石の留め金はわたしの毛が絡まらないように考えて造られているみたいだ。早速ダーリンが着けやすいように、おわりをして背中を向ける。

ね、ね、はやくつけて？

チラチラと振り向くわたしの熱視線に、ダーリンは満足したような顔であたしの首にリボンを通す。

何だかすく、くずつたい。

首周りにリボンが優しく擦れる触覚的なくすぐつたさもあるが、あたしが感じたくすぐつたさは気持ちの方だ。何だろうか？

嬉しさと同時に恥ずかしさも込み上げ、一つの気持ちが胸の中で混ざり様々な思いに変化する。

期待、惑い、歓喜。

そして生まれる、暖かい感情。

胸を打つ動悸。

トクントクンといつもよりも速く脈を打つ。

……『うじょうう？ 今すぐ、抱き付いたい。

人のままだつたなら、あたしの顔はきっと真っ赤に染まつていた事だろう。

それに人前で自分からダーリンに抱き付きたくて胸に顔を埋めるだなんて、そんな恥ずかしくてはしたない事、絶対にできない。

猫で良かつた。

ふわふわとした熱に浮かれ、振り向いた。

視界を掠めた光景にあたしの身体が固まる。

思わず目を疑う。

なんで？

『.....』

かたむすび！？

ギュッと固く、素早く一回結ばれたであらう結び目には、あたしの毛が巻き込まれて大変な事になつていて。オマケとばかりに左右には余つたりボンはびるーんと垂れ下がっている。

しかも振り向き様にそれがペチッとあたしの身体に当たつた。

なんて色氣の無い結び方！

なんだかもう、色々と台無しだ。

さすが魔王陛下の不器用さには畏れ入る。あまりに男らしくて涙が出てきそうだ。

いやいや、なんで固結びなの！？

こんなリボンを首に結ぶのなら、蝶々結び。これ、絶対に譲れません。

そんな結び方だとすぐに外れる？ そんなもの、ちょっと工夫すれば大丈夫だ。初めから蝶々結びに固定したものをリボンに縫い付けてもいい。

色々と出来るものだ。その気があれば。

とにかくこれは却下。

あたしはすぐに外しにかかる。

後ろ足を使って、控えめにちょいちょいとリボンの結び目を弄るが思つよう元に上手くいかない。

「レディ

諫めるよつたダーリンの声。

もちろん無視します。

貞淑な妻は普段は夫に従うのですが、これだけはいただけません。貞淑な妻にだつて譲れないものはあるのです。

そう、ダーリンに貰つたからこそ妥協はしたくない。綺麗に可愛く着けたいのだ。

ブイツと顔を背けて、再びちょいちょいと結び目を弄りだす。何度も弄つたせいか、やつと結び目が解れてきた。それにしても、巻き込まれた毛が痛い。

仕方ないな、という雰囲気のダーリンは、ひょいとあたしを抱き抱えると緩んだ結び目を固く縛る。

元の位置に降ろされたあたしは、結び目を確認して思いきり顔をしかめた。

『...』

今度は苛立ちから、激しくちょいちょい弄る。

「レディ、外すな」

『やうやくのひまつりで、ちやんと蝶々結びにして。信じられない、なん
で固結びなのー!』

乙女心をわかつてない！

すぐさまダーリンに抗議する。

「たかだターリンは聞こえているのはいい。でも、何でも聞くのではなく、何を話すの？」
「つ」というあたしの不満たっぷりな鳴き声だ。

110

もしも、あたしが自由に動く五本の指があつたのなら「もう、ダンスしたら不器用なんだから」とかなんとか、幸せそうに苦笑いで自分で直して終わりだつただろう。

自由に動く指先のかわりに、ふにふにしてこねピンク色のじくさゆ

甲子年

細かい作業にはてんで不向き。リボンの結び目を少し緩めるのも、後ろ足を忙しく動かすかなりの重労働なのだ。

『だから、固結びは駄目って言つてゐるでしょ！ そんな可愛いくない

結び方は嫌ーー！』

ベシベシベシベシッ！

あたしのお腹に回されたダーリンの腕に、猫キックを連続で食らわせる。

「このひ、さつきまでは大人しかったくせに。一体何が気に入らない！？ 命令だ、着けろ！」

『蝶々結びなら喜んで着けるつていってんでしょう、ダーリンの馬鹿あー。』

暴れまくるあたしにダーリンもムキになつて抑えに掛かる。負けじとあたしもクワッと牙を見せた。

「……お、畏れながら陛下。レティはリボンを着けるのを嫌がつてがつてているのではありません。結び目が気に入らないと申しております」

第三者の介入にあたし達はお互いにタリと攻防を止め。みんなが唖然とした表情でこちらを見ていた。

ダーリンがあたしを放す。そして、すごく気まずそうに、着席した。あまりの熱戦のあまり立ち上がつていたようだ。

あたしも気恥ずかしさのあまり、顔の毛繕いをして氣を紛らわせる。痴話喧嘩、みられたよー。

しかもかなり低次元の！

ヴェルガーの皆さんはあたしの言つてゐる事はしっかりと理解できるわけ。

会話（？）を聞かれた以上はいつものように、澄ました顔で「我関せず」の姿勢を貫けない。

油断した、思いきり。

魔王城ではあたしのにゃん言葉を理解できる人は居なかつたので、いつでも言いたい放題言つていたのだ。

伝わらないもどかしさもあつたが、言いたいことを誰にも気にせず口に出来る環境は鬱憤が溜まらないので、あたしはいつもでも気分爽快。

今回もその要領で、思いきり、ぼろカスに、魔王陛下に悪態つき、さんざん駄々を捏ねました。

「レ、レディ」

恐る恐るあたしを呼ぶエネリ。

ダーリンとの喧嘩を止めてくれたのはエネリだつたのだ。

呼んでくれた事にこれ幸いと、何かと目立つダーリンの傍をそそくさ離れる。

傍に近づいて気が付いたのだが、エネリの顔は緊張のせいか少し強張つていた。

額にはうつすらと脂汗が滲んでおり、張り付いた髪がなんとも色つぽい。

不謹慎な事を考えてしまつたが、もしかすると具合が悪いのかも知れない。

『……エネリ、調子悪いの？』

「えつ、そんな、事はない、わ

それなら、良いのだが。

くりつと首を傾げた時に、エメリの後ろの人と偶然にも目が合つた。その人は、何故かビクッと驚いた後、気まずそうにあたしから目を逸らす。

『…………』

何だか急にいけない事をした気分になつた。

あたしが目を逸らすと、再度視線を感じた。

もう一度素早く後ろの人を見ると、再び同じことが繰り返される。

後ろの人も、その隣の人も、斜め前の人も。

何故か固唾を飲んで、あたしの一挙一動を凝視している。

まさか、初めから皆さん の視線はあたしを追い掛けていたのだろうか？

きっとダーリンを大勢いる観衆の前で罵倒したことに関係あるのだろう。

視線が痛い。 とても。

そういうえばダーリンは魔界でとっても偉い、魔王陛下だった。

あたしだって仕えていた姫様がいきなり罵倒されれば、殺気の一つ二つくらいは簡単に芽生える。

ダーリンはあたしだけの人、ではなかつたのだ。

あたしが知つている魔界は、ヴエルガーの集落のほんの一部と魔王城の狭い一角。

本当の意味で、あまりにもダーリンを知らなさ過ぎた。自分の無知に少なからず衝撃を受ける。

一緒に生きる覚悟。“魔王陛下”を愛するといつ事。

このままでは駄目だ。

漠然とした焦りがあたしに押し寄せる。
もつとあたしは、知らなければいけない。
知りたい。この世界の事を。

キュッと弱く首が締まる感覚に我に帰る。
見れば、エネリはあたしのリボンを蝶々結びにしてくれていた。

『一』

綺麗に結ばれたりボンに、始めて感じた嬉しさが甦る。

『エネリ、ありがと』

いつものように、すりすり甘える。

一瞬顔を緩ませたエネリは、すぐにちょっと引きつった顔になった。
やっぱり具合が悪いのかも知れない。

それなのにあたしは、大人気なく駄々を捏ねて、わざわざリボンを
結ばせてしまった。

思えば魔界に来てから、いろんな人に迷惑ばかり掛けている。
ダーリンを初めとして、宰相さん、羊美少年。

ガウディにエネリ。

ツチアラシは怖いけど、迎えに来てくれた人達。
いろんな人の善意によって、あたしは生かされている。

もつと、しつかりとしないと。

猫だという、今の現状に甘えてはいけない。

まずはダーリンのペットという立場から、相棒になろう。

ダーリンは猫に癒しを感じていたわけで、きっとあたし個人に対し
て癒しを感じたわけでは無いのだ。

ふかふかの毛並みに愛嬌ある動物なんて、それこそ猫以外にも山ほど存在する。

以前に沢山の猫がやつてきた時は、奇跡的にダーリンが目移りしなかつただけで、今のあたしの立場はあまりにも脆い。

だから相棒に、パートナーになる。

“あたし”にしかできない事を見つけて、ダーリンに認めてもらひつのだ。

一つの決意を胸に固める。

でも、その前に。

うん、仲直りしよう。

まずは、思いきり嫌がつて暴れて困らせてしまったダーリンに謝ろう。

ダーリンの方に向き直つて立ち止まる。

尊大に組まれた長い足。どこか気だるげに付かれた頬杖。反対側の指ではトントンと一定のリズムで腕置きが叩かれている。

なにより表情が無い。妙にまつさらなのが余計に怖い。

な、何でそんなに不機嫌そうなの？

いや、不機嫌なのは分かる。だつてあたし、すごく嫌がつたし。猫キックしたし。

あたしが聞きたいのは、それを差し引いても余る、その非常に恐ろしげな雰囲気は一体なぜ？ だ。
もしかしてエネリにすりすりしたことが原因とか？

そんなまさか、といつ思ひとそれを搔き消すよつた過去の出来事が
脳裏に甦る。

そういうえば貴方、あたしが姫様姫様ばかり言つてると、よく嫉妬してましたね。

仕えている主の事を気にかけるのは、侍女として当然の勤め。褒められこそすれ、それに対しても拗ねられるなんて、あたし初めての経験でしたよ。

もちろん惚れられた立場にあぐらをかいていたあたしは「いやん。可愛いなあ、もう」なんて暢気な事を考えてました。
それがまさかの魔王陛下。無知とは恐ろしい。

さしづめ今回の不機嫌は、いつも自分にしか懷かないペットが、預かり知らない所で他人に懐いてしまった事に対する独占欲ゆえだろう。頼むからその独占欲、少し閉まつて下さい。

さつそく先ほどの覚悟が試される気分だ。

意を決してダーリンへと足を進める。

威圧感たっぷりのダーリンの視線にあたしの耳がペちょーんとなるが、ここは我慢。あたし、やるときはやる女、もとい猫です。
勇気を出して「じめんね」の意味を込めて、ダーリンの足に頭を寄せる。すりすり。

「はあ」とダーリンが溜め息を吐けば、威圧感はあつといつ間に消え失せた。

ひょいと抱き抱えられたあたしはダーリンのお膝に座らされた。
どうやら許してもらえたみたいだ。

「リボンの結び目が気に入らないと、レディがそういつたのか？」

ダーリンが問いかけた相手はエネリ。

本当です。

でもそれに関しては十分反省しているし、恥ずかしいので蒸し返さないで欲しい。

「は、はい」

「他には何と言つた」

「その、固結びは可愛くない。蝶々結びにして欲しい、と」

だーかーらー やーめー てー

ダーリンは少し考える素振りを見せる。何か思案するように闇色の瞳が伏せられた。

「それはレティと、かなり高度な意志の疎通が出来るところ事か？」

「はい。それも魔獣のよつな一方的な感情の吐露ではなく、お互い会話が成立します。おそらくレティ……様、の知能は我らと同じ高さと考えて間違いないでしょ。地上の種族の事は詳しくは存じ上げませんが、我らと同じ一つの姿をもつ一族の可能性があります」

妙に勿体ぶつた動作でダーリンは頷く。

「……興味が出た。じばりく滞在する」

ダーリンの一存で、あつたり滞在が決まった。

あーん、が目標です。

晴れ。

あんなに鬱々とした雨が、あつさり晴れた朝。
くわっと欠伸の後は、前後の足を上下から引っ張るような感じで伸びをする。

猫のあたしの身体は驚くほど柔らかい。あつといつ間に全長が一倍ほど伸びてしまうのだ。

あたしの手がダーリンの頬に触れる。

そう、魔界に来てとうとうあたしはダーリンと一緒にベッドで寝たのだ！

決してやましい事はしていません。

今まで乙女心の準備とやつぱりペシトの分際で厚かましいかしら？ と、じ遠慮して床に敷かれたダーリンのマントの上で寝ていたのだが、昨夜勇気を出してベッド上に飛び乗ったのである。ぽふっと音を立てたあたしを、ダーリンは微笑まし気に見てくれた。これならいけるわ！

心の中で拳を握り締めたあたしは、それでも一緒に毛布に入る勇気はまだ無く、枕元の少し離れた場所に丸くなつた。未婚の男女が一緒にベッドの上に座るだけでも凄くはしたないので、一緒に寝るだなんてそんな破廉恥な事、あたしには出来ません。

こんなに近くでゆつくつと、無防備なダーリンを見るのは初めてかも知れない。

またとない機会に、ダーリンの寝顔を思う存分堪能する。

規則正しく上下する胸。ほんの僅かに開いた薄い唇。通つた鼻筋に今は伏せられた瞳。

なんだか、新婚さんみたい。

くすぐつたいた気持ちを誤魔化すよひ、ふにふことダーリンの頬をつつく。

まだ眠つているダーリンは、少し眉を寄せながらあたしの手を掴んだ。

ふに、ふにふにふにふに

一度力を込めたダーリンは、じぱりくの間あたしのにくきゅうを堪能するかのように何度も感触を確認する。

やがてうつすらと皿蓋を開いたダーリンは、眠氣瞳であたしのにくきゅうを見つめた。

ふにふにふに

再び確めるように、にくきゅうに力が加えられる。

ちよつ、ダーリン可愛いく~！

誰もが畏れる魔王陛下が、いつも刃物のような鋭い雰囲気を纏つているダーリンが、猫のにくきゅうを片手に半分夢の世界。

このアンバランスさが堪らない。この落差は反則だと思います。はい。

ぼーっと半分寝ながら、にくきゅうをふにふにするダーリンの図にあたしは朝からメロメロだ。

そういえば、ダーリンがあたしの「くしゃくしゃ」になじつくり触つたのは初めてかも知れない。

こんなことなら、もつと早くダーリンに「くしゃくしゃ」を『えればよかつた。

ダーリンがこちらに身を乗り出す。背中に少し重たい感覚。

なんと、ダーリンがあたしを寄せて背中の毛皮に顔を埋めているではないか！

余りのドキドキと嬉しさに思わず「口口口口」と喉が鳴る。

今朝は色々と初めて尽くしだ。

「暖かいな。レディはいつも陽だまりの匂いがする」

いつになく柔らかい口調に、何だかあたしまで優しい気持ちになつてくる。

いや、ちょっと待て待て。

最近はずっと雨だったのでもく日向ぼっこ出来なかつたのだが。魔王城では毎日のように日向ぼっこしていたので、もしかしたらその時の「オイ」が残つているのかも知れない。

いやいやちょっと、更に待つて欲しい。

あたしが魔王城から飛び出して、もう十数日ぐらい経つはずなのだが、その「オイ」が残つている？

毎日グルーミングしてたのに！

これは乙女として由々しき問題だ。

今すぐ水浴びに行かなければ！

だが、ダーリンがあたしの背中に顔を埋めているので、身動きが取れない状態だ。

『…………』

ダーリングが嬉しそうなら、あたしも嬉しい。

まあ、いつか。

しばらくして、ダーリングが支度をする。

羊美少年がテキパキとダーリングの準備を整えていった。
あたしは羊美少年にも心配を掛けたようで、久しぶりに顔を会わせた時には「もう、一人で飛び出しちゃ駄目ですかね!」と半泣きで怒られてしまった。

でもその時に何故かまた、おやつを貰った。

ダーリンにくつ付いてやつて来たお城の人達は、何故があたしに「心配した」等の言葉と共におやつを貢ぐ。

美味しく頂いたので、あまり深くは考えないよ!じょ。

「レディ」

ダーリンに呼ばれて顔を上げる。

ダーリンと再会を果して、少し変わった事がある。

「今日は外に見回りに行く。その間は、エメリ・ブラウに頼んだ。行つてくるといい

。ダーリンがあたしに喋りかけてくれるよ!になつたのだ。

これはもう、嬉しかつた。

可愛がつてくれてたのはわかるが、やっぱり態度だけでは不安になる。

初めて喋りかけられた時、凄くはしゃいだわたしを静めるのにダーリンが苦労したのはまた別の話である。

しかし今回は内容がよろしくない。

お留守番通告をされてしまった。

今日もダーリンに付いて回るひつと思つたのに。

“相棒”としての在り方を模索中のわたしにとっては、あまり嬉しい状況だ。

でも、貞淑な妻は夫に……、猫のままの今では夢のまた夢の話なのでちょっと封印。

とにかく迷惑を掛けたくないので、大人しくお留守番する事にする。「にやあつ」と了承の意味を込めて鳴くと、満足そうにわたしを一撫として羊美少年と出て行つた。

眠気に負けたあたしは、しばらくダーリンが寝ていた場所で暖をとる。そのぬくもりが冷める頃、あたしの頭もよつやく覚めた。ダーリンが出ていった後の部屋はなんだか、さみしい。

エメリのところに行いつと

ベッドから飛び降りたあたしは、視界の端に映つたものに目を止めた。

『.....』

最高だ。

最高の寝心地だ。

『ねえ、ねえ。みんなおいでよ。とつても気持ちいいわよ』

隅っこの方で集団で縮こまっている仔虎ちゃん達に声を掛ける。

こわい

二わあい

れでい、それ、『せ

卷之三

「こちらを見詰めるハコの口には確かに恐怖が浮かんでいた。

みんな大好き 篠ヘッド

あたしは今、その籠ベッドを独り占め状態で寝そべっている。もともと寝心地抜群だった籠ベッドは、あたしの独断によつてシーツが代えられ、更に最高の寝心地が約束された。

常に怖がつて近づこうともしなかつた。

本當に最高なこと、 π 。

「ひいいいい！」

引きつった様な悲鳴に振り向けば、エネリの旦那さんがわたわたと壁際にくつついていた。

『何よ、なにか文句でもあるの?』

「の人に赤ちゃん言葉で散々追いかけて、あまりいい感情はない。」

じとつとした田で見詰める。

「レディちゃん、そ、その下に敷いているのは何かな? パパにも見してほしいなあ~」

「うえ!」

わきわきと両手を動かしながら迫る田那さんで、背中の毛が逆立つ。誰がパパなのよ! と、突つ込めないほど、何だか田が尋常じやなかつた。

仔虎ちゃんの所まで逃げ込む。

「うわあつー? やつぱり壁下のマント……。な、なんでものを持つてくれたんだ」

仔虎ちゃん達の影に隠れながら、そつと田那さんの様子を伺う。

「け、毛だらけ」

籠ベッドから、せっかくここまで頑張つて引きずつてきたダーリンのマントを摘まみ上げる。いや、それ汚物を摘まんでこよつてじか見えません。何て失礼な人だ。

「不味いぞ。レディちゃんが勝手に持つてきたとは言え、のまま

「ここにあれば、絶対お咎めを受けるのは僕……。いつなつたり一つそ証拠を隠滅すれば、」

「何を『ぶつぶつ』言つてゐるの、あなた」

『まああ』

『エネリ～』

『「」はん』

仔虎ちゃん達がぼてぼてとエネリの周りに集まる。もううんあたしも一緒にだ。

「エネリ、大変だ！」、「れ……」

「あらやだ、もしかして陛下の？……レーティ」

『なあに?』

「持つてきちゃつたの？」『あたしのお気に入りなの』

ダーリンのニオイが染み付いたそれは、いつでもあたしを安心せしむる。

「大丈夫よ、そこに置いておいで」

田那さんに腰に手を当て指図するエネリは、なんだか物凄く頼りになる雰囲気がでてました。

「レディ、今日は陛下と一緒にいなくてもいいの？」

『今日は表さまと外の見回りに行くんだって。だからあたしはお留守番なの』

「なら今日は、みんなで魔力の扱い方を勉強しましょうか。ほらほら、みんないらっしゃい」

あたしは首を捻る。

以前はあたしの中にはあった魔力は、猫になつたせいか今ではほんの微弱なものしか感じられないのだ。

扱い方ならもう知っているが、元となる魔力が無ければ話にならない。

残念ながら、せっかくのお勉強はあまり意味の無いものになりそうだ。

そんな余り乗り気ではないあたしに気付いたエネリがにんまり笑顔で話しかける。

「レディ？ 地上にいた頃は魔力があつたのかしら？」

あたしは頷く。

「なら、地上と魔界が別の世界なのは知っているわよね。ここは貴女のいた世界とは理も成り立ちも違うの。当然、魔力の扱い方も体に留める方法も違つてくるわよね？」

『…………』

ええと。

ぼそりとあたしの耳元で囁かれる。

「私たちみたいに、人型とれるかも知れないわよ」『や、やる、あたしやるー。』

やつぱり人型でダーリンとイチャイチャしたい。

お食事の時に、あーんつてしたり、あーんつてされたりしたい。もちろん今だつてあたしは、ダーリンに一方的にあーんつてしてもらつている。……ダーリンは手掴みですが、何か？

『頑張つて、あーんつてできるようになるわー。』

「……あーん？ 何だか良くわからないけど、田標があるのは良いことだわ」

かくして、あたしの特訓は始まった。

その頃すぐ隣では、エネリの田那さんが仔虎ちゃん達に拒絶されてショックを受けていた。

「パパだよ、忘れちゃつたのー？」

『ぱあ、こわい』

『こわい』

あたしを捕獲するときに、仔虎ちゃん達も実は巣穴にいたのだ。いきなりの父親の暴挙に怯えて隅っこで震えていたのである。あれだけ巣穴で暴れて怖がらせたのだから当然の結果だ。

ふ
ふーん

それを横田に、ちょっとあたしの気が晴れたのは言つまでもない。

へーんしん！

エネリから「まずは自分の魔力を感じるところから、始めましょうね～」と言われ、現在瞑想中のあたし。目を閉じて自分の身体の中に巡る内なる力に意識を傾ける。以前なら意識を向けなくとも感じられたあたしの魔力は、今はこうして集中しなければ欠片も感じられない。

魔界では、ヴエルガーのように獸の姿と人型の二つの姿をとれる一族は、二つの姿の種族と呼ばれる。かなりそのままだが、変な名称を付けられるよりよほど覚えやすい。

その二つの姿の種族の起源は、過去に起こった魔界での深刻な人口減少が原因だそうだ。

多種多様の種族が集まつた魔界では、始めは子孫を遺すには当然同じ種族としか遺せなかつたそのなのである。

必然的に起こつた問題が、魔界の人口低下だ。

そんなとき、種の存続の危機に一筋の光が射し込んだ。これこそが二つの姿の一族の始まりである。

比較的知能の高い獸達が何を思ったか人型をとる事で、同じ人型をとる別の種族と契る事が可能となつたのだ。

二つの姿の種族とは、魔界の環境に合わせて見事適応を果した種族なのである。

よつて一般的に魔界では、多種族とも交配可能となる人型をとれるようになると、一人前と見なされるのだ。ヴエルガーにいたつては、額の第三の瞳が開く事も条件となる。きっと他の種族にも色々異なる条件があるのかも知れない。

ちなみにエネリの旦那さんは純粹な人だそうだ。どおりであたしの

にやん言葉が伝わらなかつた訳である。

異種族の結婚で生まれる子どもは、強い方の親の種族になるそつだ。なるほど、納得。旦那さんは見るからに弱そつだ。

非常に興味深い。

もともと歴史に興味があるあたしはもつと聞きたかつたが、隣で退屈そうに欠伸をしている仔虎ちゃんにエネリが気付き、さつそく実践に移る事となつたのだ。

ところがその実践も、仔虎ちゃんにとつては退屈だつたのである。

『あそぼ、あそぼ』

いきなりの衝撃を身体に受けてあたしの集中が途切れる。そのままバランスを崩したあたしは、突撃してきた犯人と一緒に床を転げ回つた。

犯人は言わずもがな仔虎ちゃん。

あたしと一緒に瞑想していた仔虎ちゃんは、黙つてじつと動かない、と言う苦行に堪えきれず、あたしを巻き込んで遊び出したのだ。つまり飽きてしまつたのである。

やはり遊びたい盛りの子ども。一人（頭？）が遊び出すと、残りの仔虎ちゃん達も身体をウズウズとさせてそれに便乗してきた。

『いひ、あたし瞑想したいのー。』

『あやー』

何度もあたしが諫めても聞きやしない。それどころか抑えにかかるあたしを嬉々として避ける。

あたしの闘争本能に火がついた。

『アーティストの本』

『ルフ-ルフ-』

突如響いた咆哮にあたし達はヒタリと動きを止める。

エネリ

いつの間にか三ツ目の虎型に戻ったエメリが、つこりと微笑んだ。つもりのようだが、鋭い牙が剥き出しにされて、とても恐ろしい。

『わぬ、続をはじめるわぬ』

黒鑑正之助

みんな背中の毛を逆立てながら、のそそ工ネリの傍に戻りました。

それからのあたしは、ひたすら時間の許す限り瞑想をした。なんと言つてもご褒美は、ダーリンへのあーん、である。

俄然ヤル気が出てきた。

今日もあたしはターリンへの朝の挨拶の後、瞑想できる場所を求めて颯爽と散歩に繰り出すのである。

べッドからぴょんっと飛び降りたあたし、なのだが。だと効果倍増なのだ。

あ、あれ？

いつまで経つても足が床に付かない。底が抜けたという事ではなく、浮いているようなのだ。

ひょいひょいとあたしの足が虚しく宙を搔く。

首を捻るとあたしの身体から手が生えて、いや、手が支えていた。そのまま視線を上にやる。

……ダーリン！

あ、今日は一緒にいろいろして事ですね。

もちろん従います。

だってあたしもダーリンといたいからだ。

てなわけで、本日はダーリンと一緒に公務に勤しむ事になった。

晴れ渡つた空。

赤茶色の葉を繁らせた木々が果てしなく続く。その地平線の先には巨大な建築物を思わせる影がうつすらと浮かんでいた。

ダーリンのお城だわ。

広大な絶景を特等席で眺め、「機嫌なあたしは何気なくチラッと視線を下にずらすと、思わず毛が逆立つてしまつた。

絶壁！

にくきゅうから冷や汗が出る。

今、あたしはヴェルガーの集落の一番高い場所、大岩の頂上付近に

いた。

一番高い場所といつても、ヴェルガー以外の来客、つまり人の足を入れる一番高い場所であつて頂上ではない。

ちなみに本当の頂上ではヴェルガー獣型の人がだらーんと寝そべつて日向ぼっこしてました。いいな、あれ。

ここでは床にあたる岩の一部が大きく掘られていて、そこには雨水が並々と貯めらている。

ダーリンはさつきから、うんたらかんたらと水の浄化作用の事や排水などの説明を受けて、頷いたり指を指したり忙しそうにしてるのでは、あたしは景色を楽しんでいたと言つ訳である。

あ！

見知ったヴェルガーを見つけて、あたしは傍まで歩いて行く。ガウディだ。

今は虎型でおすわりしたり、辺りをうろついたりと何だか落ち着きがない。

『ねえねえ、何してるの？』

挨拶がてらに軽く尻尾を振りながら訪ねる。
あたしに気付いたガウディも、軽く尻尾を立てながら迎えてくれた。

『よつ、何してるように見える？』

『「ひひひひひ」』

『……護衛だよ、護衛！』

つまりやつさの「ひひひひ」は、辺りを警戒しての事だつたらしい。

『リボン似合つてゐるじゃねえか』

『えへへ、でしょ?』

お気に入りを褒められると嬉しくなつてしまつ。すりすり。最近、あたしは感情や好意を態度で表す様になつてきた。ガウディの太い足にありがとうの意味を込めて擦り寄る。

『ところで、ここは何する所のなの?』

『洗い場兼水飲み場みたいなもんだ。あつしひちに水を貯める窪みがあるだろ? まだ外に出すには危ない子どもがよく使つんだ。もちろん親と一緒にな』

『そういえば、上から見た景色に川や池の類いは見当たらなかつた。離れた位置にあるのかも知れない。』

あたしはふわふわ毛並みのエネリの仔虎ちやん達を思い浮かべる。確かに、大人ヴェルガーなら魔の森を突破できるが、子どもなら危ないだろ?。

『ふうん』

せつかくなので、窪みの一つを近くでよく見る。

『それは浄化前』

透き通つた水の底には、泥や砂等の沈澱物があつた。幽やかしなの

で、仕方ないかもしない。

くんくん二オイを嗅いでしまうのは、もはや本能だ。

水底にキラリと反射する何かを見つけて、あたしは思わず身を乗り出す。
そして呆気なく、ジゴーンととい音立てて落ちてしまった。

溺れる、溺れるー！

バタバタ前後足を動かす。
篷みは意外に深かった。

「ミーミーーー！」

あたしの甲高い声が辺りに響く。

『…………うん、こういう事があるから親と一緒に、なんだ』

濡れ猫となってしまったあたしはガウディにくわえられて、あつさりと救出された。

でも、その『期待を裏切らないヤツめ』みたいな目で見るのは止めて下さい。

そのまま駆け付けたダーリンの近くでペチュッと放される。

風が吹く。

寒いいい……！

大岩の頂上付近であるこの場所は、風が吹き荒びとんでもなく寒い。
すっかり身体が冷え込んでしまったあたしは、暖かい場所を求めて
本能的にガウディの腹下へ潜り込んだ。

『つ、冷た！』

ガウディの抗議は無視する。
今は身体を暖める事が優先。

あつたかーい

ぬくぬくと毛皮に包まれて、ほつと息を吐く。

「…………」

その様子を一部始終見守っていた魔王陛下が、ズボッとガウディの腹下に手を突っ込んだかと思つたら、いきなりガシッとあたしの身体に手を固定。抱つこの体勢ですね。
そしてあたしは何故か、

ズルズルズルズルー

引きずり出されました。

曝されたあたしの身体は、たちまち冷え込む。

な、なにするの、ダーリン！？

抗議するように見詰めても、取り合ってはくれない。

一瞬の隙を突いてダーリンの手から逃げ出したあたしは、再び潜り込もうと頑張るが、何故か同じようにダーリンに引きずり出される。

猫の目で見てもわかる、その魔防加工が施された高そうな服を、あたしの水気たっぷりな身体で汚せと！？

無理です。

あたしにはそんな怨みを買つ勇気、ありません。

思い返すも侍女時代。

愛くるしい毛皮のカタマリ、フランちゃん。姫様が大層可愛がつて
いた犬がいたのだが、普段は賢いそのワンコ、何を思ったのか雨上
がりの庭で走り出し真っ白な毛並みを泥色に染め上げた。

そのあとお約束の「ごとく姫様に抱っこをねだり、なんと姫様のドレ
スまで泥だらけに。

侍女仲間と苦笑いしながらドレスの着替えを手伝つたのち、あたし
は汚れものを洗濯係の下女へと頼んだ。

その後、お優しい姫様は自分の落ち度で汚したドレスを洗う下女に
申し訳なく思い、さりげなく差し入れを提案したのだ。

姫様からの心こもった差し入れを持つて行つたあたしは洗濯場にて、
聞いてしまつたのだ。

「あのバカ犬、私たちの仕事を増やしやがつて」などの罵倒怨嗟呪
詛の類いを。

しつかりと聞きました。聞きましたとも。

入つて行ける雰囲気では無かつたので、差し入れを持つたまま逃げ
帰りました。

つまり、このままだとあたしも「あのバカ猫め、躰なおしてくれ
！」などと影で言われる羽目になつてしまつ！

マント？

あれはあたしの心の安寧の為に必要不可欠なものなので、あれに關
してはどんな罵倒も受け付ける。でも渡しません。

しかし！

自分で覚悟をした事については構わないが、それ以外の事ではマン
トの前科があるだけに極力避けたい。
よつて拒否。

いーやーー！

必死に抵抗するあたしは、あつさりと裏切りにあつてしまつた。

『頼む、俺の為に陛下の所に行つてくれ

パクつとガウディにくわえられたあたしは、ペッピダーリンの前に吐き出されました。

素早くあたしを取り押さえるダーリン。なに、その連携？あれよあれよと言う間にダーリンの胸に抱かれたあたしは、高級な御服様をしつかりと汚してしまつた。

……今度、洗い場の皆さんにドン・グラを貢ぎこいこい。

固く心に誓いながら、怨みを込めてビンカ満足気なダーリンを蹴つた。

そんな事もありながら、あたしの魔力は順調に戻つてきたのである。

「レディの魔力、だいぶ高くなつてきたわね」

エメリに褒められたあたしは胸を反らす。

日々の努力の結果です。

やはり努力を認められるのは誇らしい。……ただし、動機は不純ですが。

「じゃあ、これから身体を変化させる術式を教えるわ

- ၁၂၁ -

「といつても、もともと私達一つの姿の種族は身体にその術式が組み込まれているから、難しい」と考え無くても大丈夫

- 1 -

「魔力で自分を包みながら、人の形になつた自分を思い浮かべればいいのよ。その時に身体を土で捏ねるようなイメージをしてね」

エメリさん。あたし、違うんです。

とは今さら言えない！

もともとあたしの知っている変化の魔術は、そんなに簡単に出来るものではない。

變化の対象となる媒介を用意し、しつかりと術式を練り、発動と同時に魔力を吹き込み術式を展開させ、身体を対象へと変化させる。なお、対象に変化中の時には姿を維持させるために常に一定の魔力が消費する事となってしまうのだ。

の消費を伴う疲労は見受けられない。

る傑作なのだろう。

いや、待てよ。

おたしの場合は もともとは 介護のたから
にできないものだろうか？

変化の魔術で戻る方法は一番初めに考えた。だがその時はあたしの

魔力が全く無かつた為に諦めたのだ。

でも、今は違う。

さつそく術式の構造を練り立てにかかる。

ん、なにこれ？

組み立てた術式の中に、奇妙な式を発見した。

取り外しにかかるが、この頑固モノは一向に外れようとはしない。
命に関わるようなものでもなかつたので、仕方がなく諦める事にした。

さつそく組み立てた術式に、命を吹き込む様に魔力を与える。
展開した術式が意思を持ったように、ふんわりあたしを包んだ。
久々に感じる魔力の奔流。

どこか心地よい、懐かしい感覚。

自分自身で造り出した流れに身を任せながら、あたしは目を閉じて
その時を待つた。

袋の中の猫

魔力の輝きが収まる頃、やつくりと皿蓋を上げる。

高い田線。

猫の頃とは比べられないほどの視線の高さに感心を覚える。

まさか、本当に？

夢にまで見た人の肌。蜂蜜色の長い髪があたしの肌を擦る。
思った以上に狭く感じる室内。

目を丸くしてあたしを見上げる仔虎ちゃん達は、まるでぬいぐるみみたいだ。

あたしが寝ていた籠ベッドはこんなにも小さかったのか。感慨深く眺める。

初めは戸惑いばかりが先立っていた心に、じわりじわりと嬉しさが染み渡る。

やつくり、やつくり……！

視界が滲む。

鼻の奥がシンシンとなる。

「偉いわ、レディ。よく出来たわね

エメリの称賛にも頷く事しか出来ない。

「陛下も褒めてくれるわ。貴女に変化の練習をするように薦めたの

は陛下ですもの

ダーリングが……？

感極まつて頬に手を寄せる。

ふに

不可解な感触が頬に伝わる。

「……ひい？」

何だかふにふにとした気持ちいい感触が、あたしの手のひらから頬へと伝わっているようだ。

恐る恐る、両手のひらを広げて見たいのに、見たくない。

確認しなければならないのに、したくない。

そーっと、田線を合わせれば、あたしの手のひらに、桃色にツヤツヤと輝く……

「くきゅう！」

それが何か理解した途端に、あたしは身も世もなく、絶叫した。

「……」

けたたましい叫び声が辺りに響き渡る。

「あらあら、最初は誰もがそんなものよ。でも、お披露目はもう少し先ね

みいみい嘆くあたしを、エネリがあやすよつよしと抱き締めた。

なんてこつた。

あまりにも中途半端な変身に、あたしは愕然となってしまった。

手のひらのにくきゅうの他に、エネリが頭を撫でる感触から、恐らく耳も猫のままだ、きっと。

察するに、あたしを猫に変えてしまった例の毒が邪魔をしたのだろう。

あたしを邪魔したあの感覚は、変化の術式の組み立てを邪魔したあれば、ご令嬢の呪いに違いない。

いや、はじめからその線で考えるべきだった。

人を獸に変える。

明らかに呪詛の類いだ。

もしかしたら、その呪いを解かない限りあたしはちゃんと人には戻れないのかも知れない。

背中から何か被せられる。

あたし愛用、ダーリンのマントだ。

そこであたしは裸だった事に気付く。

猫耳にくきゅうで裸で叫ぶ女。

なんだかあたし、人として色々と踏み外しかけているような気がする。

大変だ、戻れるうちに軌道修正しないと！
とても居たたまれない。

しかし、やつと戻った人の身体。

これでまずははじめの目標は達成できる。

ダーリンにあーん、つてしに行く！

「ハヤーん、ハヤーん！」

勇んでダーリンの所へ行こうとしたら、エメリに首根っこを引っ掴まれた。

「何を考えてるの、絶対に黙田よー。」

「ハヤー？」

エメリが言つには、中途半端に変化した身体を晒すこととは、とても恥ずかしい事らしい。

はい、確かに恥ずかしいですね。止めてくれてありがとう、エメリ。嬉しさのあまり暴走仕掛けたあたしは、猫耳マントという羞恥極まりない姿をダーリンの他、ヴェルガーの集落の皆さんに晒す所でした。

本当の所、人型になれる事が魔界での成人基準なわけで、今のあたしのような中途半端な変化は自分の力不足を証明するので、大っぴらに見せる事はこれ以上ない恥だということだそうだ。

これは魔界での、強い者ほど良い！ という実力主義の認識からくるもので、各地の集落や街を治める領主なども、血筋など関係無くその地で一番の実力者が治めるのだそうだ。最も、良い血統ならば強い子どもが生まれやすいと言つ事もあり、無関係でも無いらしい。難しい。

……つまり、つまりですね。

以前魔王城で、ダーリンに侍つていた猫耳のお嬢さん方について。謁見の間で時折信じられないものを見るように顔を歪めていた人達がいたのだが、その真の意味はダーリンの性癖が疑われていた訳では無く「なんつー姿を晒しとるんじゃ、この恥知らずどもめ！」と言つ意味だったのか。

またあたしは一つ賢くなつた。

「「やーん……」

自然と語尾が沈んでしまつ。

「やつそつ、分かればいいのよ。でも、そこまでできれば上出来よ」

エネリが慰めてくれた。

地上の常識、魔界の常識。

世界が変われば、常識も変わる。

同じ世界でも、国が違えば言葉も違つ。大陸が違えば文化も違つ。

あたしつたら、その事を知つていたはずじゃないの。

猫耳女がそんなに恥さらしだつたなんて。

確かに地上では、秘境の民以外にそんな事をしたら、少し痛い人に見られるだけだった。魔界のようにそこまで厳しく見られはしない。たとえ魔界であつてもいつのまにか、ダーリンというあたしの世界の中心が存在している事で、理解はしていたつもりだったが、今までどじか地上と同じように考えてしまつっていた。

「「は、魔界。あたしの世界とは違う。

もう一度、認識が甘くならないように胸に刻む。

先ほど実はほんの少し、あたしの顔を見れば、ダーリンはあたしを思い出してくれるかも知れないと、胸を高鳴らせた。
けれど、冷静となつた今では躊躇する。

もし戻らなかつた場合は恥知らずの姿を見せる事になつてしまつ。ダーリンはあたしに何かを期待して、変化の練習を薦めたのだから、その期待を裏切つてしまつ事になつてしまつ。

地上でのダーリンとの日々を信じてない訳ではない、けれど、不安が苛む。

もし、あたしを見ても思い出してくれなかつたら？

半端な姿を失望される事も恐ろしいが、思い出してくれないのはもつと、恐ろしい。ダーリンの中のあたしは完全に消えてしまったようを感じてしまうんだ。

もし、そうなら、あたしは……？

……」「いやーん？

あれあれ？

さつきあたし、ちゃんと「わかったわ」って言ったつもりだったん
だけど？

「ひさべひさべ」

エメリに喉を見せて、撫でてもうれるよつておねだりする。

微笑まし気にあたしの喉と耳下を撫でてくれた。

力加減は絶妙。まさしく神の手、いや、ママの手と呼ぶに相応しい魅惑の技。

あたしも仔虎ちゃん達もいつもメロメロになり、喉を「ガロ、ガロ」と……

「ガロ、ガロ、ガロ、ガロ～

嫌ああ、なつた――――――

音源は否定したくとも出来ない、あたしの喉！
嬉しそうに「ガロ、ガロ」なってるよ、あたしの喉！

「どうじょりー？」

あああああ……それにしても、気持ちいいなあ

『何があつた！？』

勢い良く入ってきたのは、虎型ガウディだ。
すぐさまエネリが鬼気迫る様子で一喝が飛んだ。

「ガウディ！ 貴方いつからそんな常識知らずになつたのー？」

エネリは人型なのに今にも鋭い牙で噛み付かれそうな気迫だ。
突然の罵声にちょっと耳がペニンとなつたガウディが、エネリに
応戦しようとして牙を剥きかけたが……

『すすす、スマン！ そんなつもりじゃ……！』

あたしと田が合つた途端、物凄い勢いでおすわり後退しながら自分の巣穴に戻つていった。

えーと、

これはまさか、あのパターンですかね。

「あの子つたら、信じられないわ。半端の変化を見せていいのは、家族だけなのに」

あ、やっぱりそのパターンなんですね。

そしてそれ以外に見ていい人は伴侶とかですね。なるほど、わかりました、以後気を付けよう。

ガウディは何だか魔界の常識で考えると、あたしに対して地雷ばかり踏んでいる気がする。べるんべるん毛繕い然り、今の出来事然り。

どおりで練習の時に部屋にはエメリと仔虎ちゃんだけだなあ、と思つた。

仔虎ちゃん達と兄弟扱いされてるけれど、あたし不満に思つていません！ 大人ですが。

もちろん長女ですよね、あたし？

それにしても何故いきなりガウディが入つてきたのか。

疑問に思つたが、すぐに思い出す。

そういうえば、絶叫しちゃいました。にくきゅうに驚いて物凄い音量で。

あたしの悲鳴を聞いて駆け付けてきそうな人は、もう一人心当たりがある。

嫌な予感と同時に、こちらに駆け付けてくる大勢の足音が聞こえた。

「ま、まさか」

エメリの真っ青な予感は見事的中する『仄』がする。

マズイ、非常にマズイ。

このままでは、あたしの猫耳マントが、「にゃーん」しか話せない恥ずかしい事が、どんなに破廉恥な失態が、魔王陛下公認の下に晒されてしまう！

それにダーリンには、ちゃんと変化も出来ない役立たず猫とは思われたくないし、戻るかわからぬ記憶の賭けをするには、まだ心の準備が！

横穴にはガウディ、前方にはダーリンとその他大勢。猫なのに袋の鼠となってしまったあたしは、苦渋の策として、マントにしつかりと頭を隠し、旦那さんが使っているであろう机の下に丸まった。

大丈夫、あたしは今ここにはいない！
あたしは今、黒い置物なのよ！

自己暗示をかけながら平静を保つよう心掛ける。

あたしが上手く気配が消せるかに全て掛かっている。緊張を取り除き、いかに周りに溶け込むかが大事なのだ。

あとはエメリが、なんとか誤魔化してくれる。

心強い事に、隠れるあたしの前に仔虎ちゃん達がやつて来た気配を感じる。

どうやら身を挺して守ってくれるらしい。

心中で感謝しつつ、大勢の気配がエメリの巣穴にたどり着いた。

頭、纏じなごせり

「何があった

低くてよく透る声が巣穴に響く。ダーリンだ。仔虎ちゃん達の身が強張った気配が感じる。

「陛下、その、少し我が子達が遊びに夢中になつただけですわ」

「…………」

「…………、なんだか背中にジリジリと視線を感じる。

ダーリンのマントにすっぽりと収まつたあたしは、机の下で周りの風景と一体化したはずだ。仔虎ちゃん達の壁といい、もはやあたしと判別する事なんて不可能なはず。

なのに一体、何故視線を感じる?

ジャリ……

靴底が砂利を踏み締める音。

大岩の中にあるこの巣穴は、やはり指肌が剥き出しなつてこるので。

のんきに構えている場合じやない。歩いてくる音だ、一歩一歩に真つ直ぐと。

『ああん、まあまあー。』

仔虎ちゃん達ははつれつ離れて行きました。耳と尻尾が垂れてる姿が田に浮かぶ。

これであたしを守るのはダーコンのマントのみ。

ダーリン、あたしを守ってー！

あたしを窮地に追い込んでは他ならぬダーコンなのが、魔王陛下を止められる人物なんて眞無に等しいわけで、これ頼れるのはやはりダーコンしかいない。

うん。

つまりぜひとも、心変りをしてくれないだろ？ か。急に何かを思い立つて、このまま回れ右をして退出して頂きたい。例えば、急にお腹が痛くなつただとか、減つただとか、あーんしてあげる、だとか。あたし、まだ諦めません。

そんなんあたしの心を知らずに、足音はとつとつあたしの近くで止まつた。

背中がジリジリする。

くこつ、くこつ

「ー？」

何だかお尻を引っ張られている感触。

これは、もしや乙女の、あたしのやわ尻が触られているのか？

くこつ、くこつ、くこつ

何するのよ、スケベ！

不屈き者の手をはたく。

ペシッといい音が響いた。

触つていいのは、ダーリンだけ……いや、ダーリンであつても心の準備が必要なので、やつぱり駄目だ。

こういう事は、双方の合意が必要であつて、決して愛する人の求めであつても……「こにゃ」にゅ。こや、でもやはりダーリンからだと、「こにゃ」にゅ……。

悶々と一人想像たくましくしていたあたしだが「ひつ」と悲鳴ならぬ悲鳴だとか「ごくり」と固唾を飲んで見守る様子だと、ただならぬ周囲のざわめきで我に帰つた。

あれ？

あたし手を使つてないよね、だつて今、丸まつてるし。

「レディ、尻尾が……」

溜め息と共にエメリが呟く。

しつぽ……？ しつぽと並こまると、あのお尻から生えてますふさふさとしたアレですか？

ま も か ！

今あたしは、猫耳、にくわゆつ、「こやーん」に飽きたらず、しつぽまで生えているといつのかー？

そひこ、まもかまさか！

あたしが勢いに任せて、しつぽで呑いてしまつたのは、ダーリンの、

手……？

終わった、あたし。

もつと考えて行動するんじや、なかつたのか。
このまま半端な姿を見られてどうなつてしまつと黙つと、ぶるつと
身体が震える。

仔虎ちゃん、壁になる前に気付いて下さー。でも可愛いくから許す。
時間よ、戻れ。出来ればあたしが変化する前に。

真面目に祈つてみるが、効果無し、と思っていたのだが、あたしの
願いが聞き届けられたのか、突然フツと周りの喧騒が消えた。

そつと顔を出す。

闇。

見渡す限り虚無の空間が広がつていて。
周りの喧騒も、ダーリンの声も何もかもが遮断された、闇の中にあた
はいた。

不思議な空間。

右も左もなれば、上も下もない。

水の中を揺蕩うように、身体の重心が定まらない。

「じー、どー?」

あたしは確か、エメリの巣穴にいたはずだ。

そこへ、あたしの悲鳴を聞き付けたダーリンがやつてきて、隠れて
たら尻尾を引っ張られて、それで、
それで、闇に包まれていた。

ひとまずの危機脱出に、張り詰めていた息を吐く。

ここが何かは知らないが、あのままあの場所に居るよりずっと良いはずだ。

「レディ様」

突如闇の中で響いた声に、弾かれたように振り返る。

『……！ 侍従長さま、』

あわてて口を押さえた。

今あたしの言葉は、にやん言葉。
思わず昔のように呼んでしまった。

ダンディなお髭の似合の紳士、あたしが働いていたお城の侍従長様
だ。ただし、『元』と付く。

その真の姿は、魔界でダーリンに忠誠を誓っている六柱、とんでも
ない実力者、という噂の闇の精靈で、名前はたしか……、ネメシス
だ。

ほつぺも落ちるお魚珍味、ドン・グラを初めてあたしに持つてき
てくれた人もある。

「言語の違いなら大丈夫でござります。『耳』の能力持ちの者に造
らせました」

指差す先には三角形の物体が一つ、頭に鎮座している。

「おじがましくも、レディ様とお揃いにさせて頂きました」

猫耳ですか。お揃いですか。そうですか。

しつとしながら言つてくれたが、真つ直ぐに伸びた背筋にカツチ
りと着こなされたお店の見本の様な服装に、猫耳はものすごく違和

感を感じる。

……もう、なんでもいい。あたしはとても疲れた。

「お久し振りに『じやない』ます。『じつ』して顔を合わせるのは謁見の間、以来ですな。贈り物は気に入つて頂けましたかな」

『…………腰に掛かるくらこに、美味しう』しました

「それは結構に『じやない』ます。はるばると捕りに行つた甲斐が『じやない』ました。

それにしても、そのお姿。やはり貴女は、……おつと、貴女の御名は今のは魔界では禁句でした。今まで通りに“レディ様”と呼ばせて頂きます」

はいはい。

もう、好きなよう……、え、今なんと？！

思わず耳がピンと立つてしまつたので、あわてて手で抑える。

ええい、恥々しい！

ただでさえ目立つのに、存在を主張するな、耳！

お前もだ、しつぽ！

「こやはや、さすがレディ様の耳は本物ですので動きますなあ、なんと素晴らしく！

私は作り物ですので、残念ながら動いては……、いえいえ、『コフンッゲフンッ』

……よし、何だか雲行きが怪しくなりかけたが、何も聞かなか

つた事にしよう。うん。

でも、身の、いや耳の危険を感じるので、ダーリンのマントを頭からすっぽりと被り直す。

だから残念そうに頭を見ないで下さい。

「まずレディ様のお立場を説明する前に、お勉強といきましょう。
“一人の英雄物語”はご存知ですかな？」

馴染み深い童話にあたしは頷く。

あたしの国では、子供の頃必ず寝る前に親から聴かれる物語だ。この物語は歴史上実在した一人の英雄の話で、現在でも人気が高く謳う吟遊詩人や、旅芸人の劇なども良く見かける。

特に英雄の一人は我が国の建国の祖でもあり、王家の催しなどでは必ずその物語を題材とした歌などが披露されるのだ。

我が国では、たしかこの間建国千年祭をしたので、物語の舞台は約千年前となる。

知らない筈がない。

「圧政に苦しむ民を救うために立ち上がる一人の英雄。生まれる友情、英雄に至るまでの葛藤、心踊る展開。実に素晴らしい物語です。まさに後の世に語られるに相応しい物語ですね！」

かなり熱の入ったネメシスの語り。ファンなんですね、あなた。

「では、その後二人の英雄がどうなったかご存知ですか？」

『一人はうちの国のご先祖様でしょ』

「そのとおり。それではもう一人は？」

物語を思い出す。

大陸を支配していた皇帝が討たれたのち、民は各自に慕う英雄について行く。

一人は世界を放浪しやがて清き森へとたどり着き、腰を落ち着けた。それがうちのご先祖様だ。

あれ？

もう一人は？

民謡、吟遊詩人の唄、観劇、童話。

そのどれもが一人の英雄を祭り上げるも、その後を語るのは建国の祖のみ。どの物語ももう一人の英雄には触れさえもしていない。たしかにうちのご先祖様の話を中心にするのは、仕方がない。でも少しくらい伝わっていてもいいのに、不自然なくらいに誰も気はない。劇はいつでも大円満で終わるから皆それで満足してしまうのだ。少しの疑問なんて、楽しい雰囲気に呑まれてあっという間に忘れてしまう。

一つの推測があたしの頭を掠めた。

『……誰も知らなかつた？ だから語れない？』

あたしの回答に、ネメシスは出来の良い生徒に満足したように笑みを浮かべた。

「そのとおり、英雄は姿を消したのです。彼を慕う民らと共に。補足するのなら、情報の制限をしているのは王家ですね」

そんなまさか。

かつて大陸を統べたといつ帝国に住まつ民は、何千何万といったことか。

人望が低かったのなら、英雄とは讚えられない。

もう一人の英雄にも、相当な人数に慕われていた筈だ。

それが全て消えた？

そして我が祖国も一枚噛んでる？

「答へはこの魔界にあります」

『……まだのこしのは嫌いよ』

「そのもつ一人の英雄とは、魔界の王にして、最高の魔術師。我らが魔王陛下にござります！」

ネメシスの口調は今まで話を聞いていた中で、一番熱が入っていた。さすがダーリン！

惚れ直します。

熱が伝染したあたしも興奮してくる。

魔界の民は、元はあたしと同じく地上の民だったのか。思わぬ所で失われた歴史を発見した。

『つまり、ダーリンは英雄の子孫だといつことなのね！』

「いえいえ、陛下こそが英雄なのですよ」

『……子孫なんじやないの？』

『本人であらせられます』

お？

「陛下が向るは闇、そして空間。同じく対となる力、光、そして時の干渉を完全に防ぐことができます」

『…………』

わかりました。

つまりあたしとダーリンの歳の差は千才以上だという事ですね。

まさかの歳の差、なんてこいつた！

さすがのあたしも四桁以上離れているとは思わなかつた。
好奇心が刺激される。

『でつでつ、なんでわざわざ魔界に引っ越したの？ 王家が絡んで
るってなんで？』

「引っ越したのでは、ありません。何もない空間から一から造つた
のです」

……つ、造つた？

「建国の祖に口止めしたのは、単に魔王陛下が面倒くさがつたから
です。魔界の起源はなんとなくお分かり頂けたようなので、本題に
入ります」

いやいや、疑問だらけです。

簡単に造つたとか面倒だったとかで省略しないで、どんな術式を用
いたのだとか、大地はどうしたのだとか、四大元素はどうなつてい
るのだとか詳しく聞かせて欲しい。

もしや、あたしに詳しく述べても理解できないとか思われてるのか。失礼な。

だが、その疑問も次の言葉で綺麗せつぱり吹き飛んだ。

「……貴女の御名は魔界の『』一部ですが、今や稀代の大悪女として知れ渡っています」

『！？』

ああああ悪女、ですと？

これからあたし

何だかとんでもない言葉を聞いた。

悪女、と言いますと騙したり奪つたり盗んだり、色々と性質の悪い女性の事ですよね？

あたしは善人でも無ければ、悪人でも無い、と自分で認識していたのだが。

ただし、自分の好きなように生きてきた事は認めよう。

殿下のお菓子を摘まみ食いに始まり、露店で売つてた竜鱗の小手を、もつともらしい理由を付けて「それ偽物」と言つて安く買い取つたり、腹が立つた貴族のカツラに細工をして公衆の面前で禿とバラして恥辱を舐めさせたり、姫様の婚約者が気に食わなかつたので皆と共謀して破棄させたり……

あれ？

十分に悪女なような。

しかし、まさか今まで一度も来たことが無かつた魔界で、何が間違つてそんな大層な称号を得たのか。

それに“大”が付くときた。

酷く動搖する。

誰が何？

ダーリンとの歳の差は千歳以上。

やはりネメシスはあたしの知つてゐる侍従長様だった。

禁句。

色々な情報が頭の中を行き交い、新たに生まれた様々な推測が飛んでは消える。

混乱し過ぎて頭の中が真っ白だ。自分を取り戻す為に頭の中を整理しよう。

まずは、ネメシスがあたしの知っている侍従長様だったことに、少し安堵した。

何故ならば、ダーリンといい、ネメシスといい、“あたし”を知っていたはずだったのに、まるで初めからいなかつた様な態度をとっていたのだ。ダーリンに至つては綺麗さっぱりと頭の中から除去してくれていたのだ。

例えば、違う時間軸の同じ世界だとか、似ている別世界だとかにでも迷い込んだのかと内心冷や汗が出た時もあったのだが、ひとまず悪女云々を抜きに考えると、やはりこの世界はあたしの知っている世界だ。

あたしの名前が禁句というのは、一体どしどうことなのだろうか。悪女と罵りを受けるのだから、せつと相応の何か訳があるのかも知れない。

ダーリンがあたしに魔王だといつ事を隠していたように、あたしもダーリンに隠している事がある。

あたしが姫様付きになる以前は何をしていたか、という事だ。

まさか、その事が？

「貴女は、陛下を裏切つてしまつた」

妙に落ち着いたネメシスの口調に、あたしの心臓が一瞬止まる。

『あたしが……？』

まるで覚えが無い。

それなのに早鐘のように打つ動悸が治まらない。

「陛下が遠征から帰還されたのち、王城の一角にて逢い引きを田撃したのです。

相手の女性は、貴女でした

あたしの想像していた事柄とは違つたものの、それこそ覚えがない。

『ま、待つて。あたし違うー。』

否定しなければ。それは、あたしじゃない。

あたしは誰も裏切つてはいない。

あたしが猫になつたとき、ダーリンはまだ遠征から帰つちゃいなかつた。

ネメシスは悲痛な表情で頷いた。

「ええ、知つております。

簡単に説明致します。魔界全体が膜で覆われていると考えて下さい。この膜はいわば守り、防御壁。何から守つているかと云うと、次元の歪みから守られています。

本来なかつた場所に世界が造られた訳ですから、放つて置けばあつという間に歪みに呑み込まれ、新たな別の世界の礎にされるか、または未来永劫に次元の淵をさ迷う羽目になるでしょう。

そうなれば、もちろん誰も生きてはおりません

『……？』

妙に急いた、意図的に感情を込めないよつと淡々と魔界についての説明がなされる。

知つている？ それはあたしの潔白を知つていると言つた事なのだろうか。

だとしたら、何故？

どうして、魔界の話になるといつのか？

あたしが聞きたいのは、そんなことじやない。

「陛下の機嫌に天候が左右される」とは「存知でしょうか？」膜を造られたのは、我らが魔王陛下にあらせられます。陛下の魔力によって造られたそれは、当然陛下の影響をとても受けやすい。

よつて、些細な感情の変化で膜が揺らいだり、厚くなったり、次元と魔界の間に摩擦が生じます。その結果、天氣といつ我々の目に見える形で知らされるという訳です。

「理解は頂けたましたか？」

……陛下には、常に平静でなくてはならないのです

畳み掛けるような説明が終わつた。

さまざま情報があたしの中でパズルの様に組合わさり、一つの推測が生まれる。

魔界と膜。

ダーリンが造つた。

天氣。

あたしが裏切つた。

陛下には、常に平静でなくては……

まさか

自分でも顔が強張つたのがわかる。

まさか、ダーリンの記憶が無くなつたのは……

「お気付きかもしだせませんが、貴女の記憶は我々が消させて頂きました。陛下は非常に取り乱し、錯乱状態に陥り、……っ！」

ネメシスは最後まで言えなかつた。
あたしが思い切り殴つたからだ。

ひどい、ひどい、ひどい！

嵐の様に吹き荒れる感情はビビりあつても収まつてはくれない。
衝動のままにあたしは胸ぐらを掴む。

『あつあたし、猫だつた！』

それが真実。

猫になつてその後、あたしじゃない誰かが、あたしに成り済ました
のだ。

あたしの不在に、一体何があつたかなんて想像に難くない。
けれど、この今の結果はダーリンも誰も、あたしを信じてはくれなかつたからだ。

『ずっと、猫だつた！』

ひどい！

裏切られた？

裏切られたのは、あたしの方だ。

「ずっと森の中を迷つてた、お腹空いて、追いかけられて、殺され

そうになつて、「

それでもまた会いたいと願つて、会えば氣づいてくれると、僅かでも灯る希望があつたから、あたしは頑張つてこれた。

「それなのに…」

どんなに必死に帰つたとこりで、誰もあたしを待つてはくれなかつたのだ。

さつせと魔界に引き上げたのだらう。

偶然にも魔界に落ちたあたしがやつと会えたのは、何もかも忘れた

ダーリンだ。

こんなことつて、ない

頭のどこか冷静な部分があたしに告げる。

これは、ただのハッ当たりだ。

あたしが気を付けていれば、こんなことは…

いや、違つ。

あたしにも怒るくらいはいはずだ。

やむ終えない事情があつたとしても、あたしに聞する記憶を、あたしが生きた軌跡を勝手に消す事は許されないはずだ。

何もかも無かつた事にするなんて、酷い、酷すぎる。

ねえ、そんなにあたしは貴方達にとつて邪魔だつた？

「いづする他、無かつたのです

『そんなの、ただの言い訳だわ！』

全て悪いのは、私。そんなネメシスの潔い態度が嫌だ。

そんな重大な事柄を、ネメシス一人の独断で決めたわけでは無いはずだ。でも結果的には賛成した。

あたし達から大切な記憶を奪つたことに罪の意識を感じているから、

あたしから責められたい裁かれたい。そんな気がして嫌だ。

一人だけ楽になろうなんて、卑怯だ。

あたしだって、酷く後悔している。責任を感じていかないわけではない。

一時の感情の吐露は確かに楽にはなるだろうが、後に生まれる罪悪感に一体あたしはどうすればいいのだろうか。

ボロボロと零れる大粒の涙を拭う。

『もつと他のやり方があつたでしょう。……何で誰も信じてくれなかつたの?』

ぐずぐずと鼻を啜る。

記憶を奪う、それこそ本当に最後の最後に奥の手として使う最終的な方法だろうに、何故そんな方法をとつたのだろうか。

それこそ、婚約者に裏切られるという悲話はあちらこちらで聞くと言つのに。あたしは裏切つてはないけれど。

しかしダーリンの本当の姿を知つた今では、あたしを非常に邪魔な存在と思つた誰かが、排除するため記憶を消したかも知れない、と勘織りたくなつてくる。

いや、もしかしたらあたしを猫にしたのも、その一味かも知れない。おかしいと思ったのだ。

ただの貴族の令嬢が、あたしを猫に変えるほどの強力な呪いをかけるなんて普通には無理なはずだ。しかし、裏で魔界の権力者がいてるとなると話は別だ。

これは、しばらくは気を抜く事は出来ないかもしだら……

「陛下は貴女を殺してしまわれたのです

顔を手で覆つていた思案していたあたしは、ピタリと停止する。

今なんど？

耳だけは、今の単語何？ とばかりにピクピクと動く。泣きすぎて耳がおかしいみたいだ。猫耳ですが。あまりの衝撃発言に一気に頭が冷えた。

『ええと、あたし、生きてま、す？』

自然と語尾が不安げに上がる。
もつと自分に自信を持たないと。

いや、でも猫の身体だなんて可笑しいと思つたような。ひょっとして実はあたしは既に死んでいて、たまたま近くのこやんこにとついて身体を乗つ取つたとか。

いやいや、はたまた猫に転生を果たしたとか。
実はやはり冷静ではなかつた頭で、あたしを殺しちやつた発言の意味を必死に考える。

「正確には、貴女の形をした傀儡を、です」

傀儡、といつと？

ダーリンが、あたしを殺した？

まさかそんなこと、ダーリンがあたしを傷付けるなんて。

「愛が深ければ深い程に憎しみも増すといいますか、まさにその通りで。あろう事か挑発的な言葉を陛下に吐かれ、まあ、プチつとやつてしまわれた訳です。非常によく出来た傀儡でした」

チラリ！？

それは果たしてダーリンの堪忍袋か、あたしの身体なのか。

「私共のしたことは、決して許されない事でしょう。しかし取り乱す陛下に、段々と精神の均衡を危うくされてゆくの方を前に、こうする他に方法が思いつかなかつたのです。

陛下と魔界の為、最良の方法だと信じて実行したのです」

真っ青になつてしまつたあたしは、まさに最後で最後の奥の手として、記憶を消されてしまつた事に納得する。

魔界のため。

ダーリンが魔界を造つた。ダーリン無くしては魔界の存続が危うくなる。だから、あたしを消した。

「貴女は聰い人ですからお気付きかも知れません」

狡い人だ。

もうすぐダーリンに見られると言つ時に、都合よくあたしはこの妙な空間に助けられた。

それって、本当にあたしのため？

答えは、否。

おそらくあたしを見て、万が一ダーリンが記憶を取り戻すのを避けるため。

今のは本当なら、ダーリンが記憶を取り戻すと、何も知らないあたしが能天気に考えていたハッピーエンドの物語のような事が起るのではなく、ドラゴンも裸足で逃げ出すような魔界の膜が弾ける

出来事が起るにちがいない。

誰がどこまでこの件に関わっているのか知らないが、あたしはこれからどうするべきか。

残念ながら、決まっている。

知らない頃ならこぞ知らず、あたしはもう、魔界とは無関係ではない。

魔王城の人達に、ガウディ、エネリ、仔虎ちゃん達。今まで関わった色んな人の顔がよぎっては消える。

今あたしは彼らを危うくしてまで、ダーリンに思い出してほしいとは思えない。

勘違いをしないでほしい。

あたしはダーリンが好きだ。あたしの夫になるはずだつた人だ。過ごした日々は、かけがえのないものばかりだ。

本当は思い出して、欲しい。

でも大丈夫。

あたしはあたしに言い聞かせる。

あたしが覚えているから、それでいい。思い出のダーリンは確かにあたしに愛を捧げてくれた。その真実があるなら、あたしはこのままで大丈夫。

また一から関係を始める。

今でも破格の待遇なのだから、以前のあたしが決意した、"ダーリンの相棒"への道を模索するのだ。

『もうしばらくは猫のままで、頑張る事にする』

なんだか色々と吹っ切れた。

終わつてしまつを小難しい事を「ひやひや」と悩んでも仕方がない。

どんなに事態がややこしくなつても、自分のしたい事は見失うな

あたしの師匠の教えただ。

じたばたと、ここで黙々を埋ねても現状は変わらないし、せつとネシスが変わる事を許さない。

これは警告でもあるのだ、きっと。

あたしがダーリンにこの姿のまま会つ、と誓つたら向をしてでも止められるのだわ。

「申し訳ありません。貴女が無事に過いませぬよつ、全力で尽くします」

綺麗に深く礼をとるネシスは、ひとまずはこれから様子で信用する事にしよう。

こつなつたら、あたしは猫で魔界の天下を取つてやる。

六柱なんて目じやない地位を手に入れてやるのだ。

押しも押されぬ、魔王陛下の愛猫になつて奴らを尻に引いてやるー

しばらく書けなかつた分まで、まとめてペンを取ることにする。

ヴェルガーの集落で見つかったレディを連れて城へと戻る。
思つた以上に長い留守となつた。

シュベルには悪い事をした。

まさかレディがロッテに驚いて逃げ出すなんて、思いもしなかつた。
しばらくレディの安否が気になり仕事に身が入らなかつたが、まさ
か猫一匹のために権力を公使する訳にもいかず、随分と自己嫌悪に
陥つてしまつた。

偶然にもヴェルガーの集落で見付からなかつたらどうなつていたこ
とか。

以後十分に気をつける事にする。

帰りはレディをマントと一緒に籠の中に入れて、驚いて逃げないよ
うに蓋もした。

門番のロッテについても早馬を送り、念のために鎖に繋ぐように指
示を出す。

そのかいがあつてか何事もなく、戻れた。

予想以上に長い滞在となつてしまつたが、結果的には集落の現状を
知ることが出来て得るものは多かつた。
なによりヴェルガーの姉弟一人がレディに付いてくる事となり、城
への出仕が決まつたのだ。

奔放な彼等は他者と共同の生活は好まないため、なかなか誘つても
城へはやつて来ないのだ。

ヴェルガーの魔眼は重宝する事になるだらう。

しかし一人は子連れのヴェルガーのため、少々注意が必要だ。

……不満を挙げるのなら、ヴェルガー弟は少しレディに馴れ馴れしくないか？

気になるのは、人型になれるようになつたレディの事だが、中途半端に変身した身体を見られるのは、嫌ならしい。それは地上でも魔界でも同じならしく、あまりにしつこくレディに頼んだら機嫌を損ねたらしく、噛まれてしまった。

引っ搔くのではなく、噛まれてしまつたので相當に怒つていたのだろう。

噛まれた事にも驚いたが、意外にも痛かつた。まじまじと感慨深く噛まれた手を見つめる。

レディは身体は小さくとも立派な武器を持つていた。

思わぬ子の成長を見た親の気分はこんなものかも知れない。噛み跡は小さいながらも、くつきりと牙の跡が残つてゐる。レディはこのことを気にしているらしく、暇があれば舌で舐めてくる。一方で自分の武勇の跡を舌で触つて確かめて、誇つているような気がしないでもない。

ざりざりとした舌の感触は、なんとも「そばゆい。

そういうえば、ネメシスの奴は自分一人だけレディの人型を見たらしい。

奴ときたら、一番いいとこ

重厚な扉を叩く音にペンを置く。
さりげなく日記を書類の下に隠す。

「入れ」

「失礼致します」

許可を出せば、入ってきたのは案の定シユベルだった。

「陛下、地上の聖王から封書が届いております」

難しく眉を寄せながら切り出す。

聖王とは聖地を治める地上の信仰の要であり、お互に長い付き合い
でもある。

しかし世界が違う今、魔界を覆う膜に負担を掛けないために滅多に
正式文書はやり取りしない。使者を立てて成されるそれは、まずこ
ちらが通路を作り準備できた折を伝え、向こうが通路を門で繋ぎ、
出入りする。

招き入れるのも送り出すのも中々骨のいる作業なのだ。

少しくらいの出入りなら勝手に膜は修復するので問題はないが、魔
界の常識では膜を傷付ける行為の類いは決して許される事ではない。
魔界の存続がかかっているのだから。

まさか王自ら、それを破る訳にはいかない。
国の頂点とは、なかなか面倒なものである。

今回の手紙は内密に送られてきたもので、あっさりと許可なく膜を
破つて届けられたものだ。

これは暗黙の了解として処理される。

魔界の上位の者も自由気ままに出入りしているし、これらも程なく修復されることだろう。

あまり目くじら立てなくとも、地上と魔界は切っても切れぬ関係にあるのだ、関係を悪化させても良いことは無い。

さつそく手紙に目を通す。

海原を治める海神と原初の炎の精靈の関係が悪化し、一触即発の不穏な空気が漂っている。

星の四大元素である彼等が衝突すると、地上に多大な被害をもたらし隣接する魔界へも影響が出る。

彼等の仲裁を頼むかも知れないので、そのつもりでいて欲しい。

との内容の手紙だった。

溜め息を吐く。

また、魔界を留守にするかもしない。
せっかく落ち着いたかと思ったのだが、どうやら厄介事が舞い込みそうだ。

「陛下、一体どのような内容でしょう？」

内容が気になるらしいシユベルは少々落ち着きなく問う。
手紙を差し出すと、恭しく受け取った。
シユベルの眉間に皺が寄る。

「何も陛下が出ずとも、他にも候補がいるでしょう」

混じり気のない純粹な水と火。

以前ならば、純粹な星の力を持つ彼等を止める者は居なかつたが今は違う。

風を統べるものが生まれたと聞いた。

シユベルが言う候補はその者の事だ。

仲裁は彼等と同じ立場である、星の四大元素がする事が好ましい。手紙が再び手に戻る。

「それに関係しているのかは不明ですが、地上の密偵からの情報で、……聖女が行方不明だそうです」

執務机の隅で丸くなっているレディの耳が動く。

「表向きには体調を崩して伏せつているとの事ですが、実際には聖地のどこにも見当たらないだとか」

それまでは惰眠を貪り、存在を感じさせなかつたレディがむくりと起き上がり、手紙を持つ腕へと擦り寄る。そのまま「ロン」と身体を寝かすと、手紙の前を陣取り机に腹を付けた。まるで手紙を覗き込もうとしてるかのようだ。

手触りの良い暖かい感触が手に伝わる。自然と頬が緩むのを感じた。反対側の手で撫でようと伸ばしかけた手を止める。

途端に陥しくなつたシユベルの顔に気付き、要らない書類を丸めて床に放り投げると、すかさずレディが飛び掛かり転げ回る。

一先ずの危機は回避した。魔王を脅かすとは、シユベルに魔神の称号でも与えた方がいいのだろうか。

「……話を戻します。聖女の事はともかく、返事はどうなさいましょつ？」

「部外者がいきなり口を出すと悪化する恐れがある、仲裁はできる限り彼等双方に詳しい面識のある者にするよつにと断つた上で、あくまで決まつた訳ではないから内密に取り合つ事を条件に、万が一

仲裁するときの為に衝突の原因と関連書類をひりひり送るまつばえ
てくれ。

あと状況は変化しだい逐一教えるよつこと付け加えろ。

聖女の件は、ひちから指示がない限り触るなと密偵に伝えり

仲裁することは無いだらうが、地上の情報を知ることは絶好の機会で
もある。

オマケに聖王のお墨守をきた。これを利用するに越したことはな
い。

魔界の魔物がたまに歪みに落ち地上へと出る」ことがあり、その際に
は甚大な被害をもたらす事が多い。

魔界が積極的に情報を収集する事に、よく思わない輩もいるのだ。
彼等は魔界に、非常に恐怖を抱いている。

「では、その旨伝えます」

退出するシユベルを見送る。

魔界と地上の確執を思つと一気に心労が出た。
癒しが欲しい。

ふかふかの蜂蜜色の毛並みを求めて部屋を見渡せば、レディはすぐ
に見付かった。

何か言いたげに、じいじとひちからを見上げている。きっと邪魔者が
居なくなつたから遊んで欲しくなつたのだらう。
そつそく机の上に呼ぼうと……

「仕事はサボらないよつとお願いします」

「…？」

扉の隙間から顔を覗かせているのは、返書を頼んだはずのシユベル

だつた。

ノックはどうした?

仕事はする。

返書の手続きに行つたのでは?

そのどれも言えず、頷くしか出来なかつた。

その間にレディはブイツと顔を逸らして調度品の間を陣取り、前足を折り畳み寝る体勢に入る。

残念ながら、レディは賢い猫だつた。

満足気に頷くシユベルが憎らしい。

今日の天気は曇りになりそうだ。

怒りよりも食欲

「レディ様へ、後生ですから退いて下さーい」

何度もかの羊美少年の懇願に、あたしは『どひこいしょ』と身体を退ける。

毛だらけのマントを生暖かい目で見つめる羊美少年を横目に、あたしは足を伸ばして、かいかいかいかい、と身体を搔いていた。中途半端に人型に戻れるようになつたあたしは、さつそくダーリンとの甘ーい日々を過ごすべく人型になるようになつた、……のではなく、今まで通り猫のままで過ごしている。

恐ろしくて、とても戻れません。

と言つのも、人であつたあたしの魔界での認識は、「魔王陛下を誑かした挙げ句に裏切つたとんでもない大悪女」として名を馳せているからだ。

オマケにダーリンがあたしの記憶を取り戻すと、魔界の崩壊という危機が待ち構えているときた。

おかげさまで「一度人型になつて欲しい」というダーリンの夢のようなお願いを、ことごとく蹴つて蹴つて蹴り倒した。

まったく、人の気持ち知らずに無理難題を吹つ掛けてくれる、と苛立ちに苛立つたあたしが痛ーい一撃を食らわしてやつと黙つたのだ。信じてくれなかつた恨みを込めてガブツといきました。ふん！

その噛み跡を見た、例のあの人から丸焼きにされかけたのは、また別の話である。脱兎のごとく逃げました。

現在あたしは、魔王城にいる。

ダーリンは唐突に、ヴェルガーの集落に来たように、唐突に城へと帰る事になつたのだ。

原因は、例のあの人だとあたしはにらんでいる。

そう、例のあの人、えーと……、宰相さんだ。

帰ってきたあたし達を出迎えた宰相さんからは、薬湯のニオイがふんぶんと漂つっていた。お腹を擦りながら顔色は、たぶん悪かつたようと思つ。次の日にはピンピンと仕事をしていったのは少々解せないが。

しかし、げつそりとなりながらもダーリンの留守を守るなんて、宰相さんは宰相の鏡だとあたしは思う。

あたしの国の宰相は、そりやあ腐つていた。汚職に横領、着服何でもあり。しかしながら証拠らしい証拠は掴めず、殿下はいつも火でも吐く勢いで怒つていた。あの宰相ときたら年甲斐も無く三十才以下のおさんをもじつて、……。

ダーリンとあたしの年の差の方が、なん十倍もあいてました。

もう年の事は言いません。もしかしたら物凄い熱愛の末かも知れないし、うん。

時間が変化をもたらし、この世に不变は無いよ、あたしの日常もちょっぴり変化した。

ヴェルガーの集落から戻つて以来、あたしの行動範囲は格段に広まつた。色々と見聞を広めようと思案した結果である。

そう、あたしは諜報猫になるのだ。

ヴェルガーの集落で悟つたことなどが、あたしの見た目はかなり

弱々しい子どもらしい。……か弱い乙女ですか。

その見た目を生かして、警戒心無しの相手に近づき、じっくりと聞き耳を立ててやるのだ。

ダーリンにも情報は役に立つはず！

その延長線で、あたしが人に戻った時のための下地として、あんなことやこんな情報を掴んで、悪女でも誰の抗議も黙らせられるように頑張るのだ。噂好きの侍女を舐めるなよ。恥ずかしい秘密を暴きまくつてやる。

謁見の間でお仕事中のダーリンにちゅつちゅしてから諜報活動に勤しむのだが、最近お気に入りはお城の屋根を伝つて城壁へ、それからちゅうど城門の真上へと移動し、下を見下ろす事だ。

猫ですから、日向ぼっこが大好きなんです。

ちよこんと座りながら眺めると、実に様々な形態の人々が魔王城へと出入りしている。

角の生えている人、鱗びっしりの人、大きい人。翼が生える人。多種多様なこの人達を観察するのがあたしの日課だ。といつても、門はとても大きいので上にいるあたしからは、彼等の表情までは分からぬ。

「バウツ、バウバウツ！」

尻尾振りながらあたしを見上げる門番は無視。構つて欲しいのだろうけど体格差を考えて下さい。プチツといつちやいます、あたしが。

「バウツ！ ヘツ ヘツ ヘツ」

魔王城の番犬ケルベロスは三つも顔があるから、鳴き声がとても五月蠅い。

道行く人が時々ケルベロスの視線の先を追つて、あたしを見るのがこれまた微妙に恥ずかしい。

通りすがりの人は、泣く子も黙る魔王城の視線の先には一体何が、まさか魔王様！？ と期待し、はやる心で視線の先を追つて行き、そこにいたのはなんと……、あたしですみません。

ということが日常茶飯事なのだ。

「バウバウツ！」

鳴き声は五月蠅いけれど、しょせんは犬。大門の半分くらいの大きさしかないケルベロスにはここまで登つてくるのは不可能だ。と、思っていたのだが、ぬーっと目の前に現れた黒い巨体。前足を引っ掛け、ここまで顔が三つもやってきました。

『……たつ、立つのは反則だわー！』

あたし？

もちろん脱兎のごとく逃げました。

同じ愚は一度も犯しません。

森ではなく、お城の中に逃げ込む。

隠れる場所、隠れる場所。あたしの身体がすっぽり入る場所！

更に階段を降りて通路の隙間を通り、やつとポツカリと空いた穴を発見。迷う事なく身体を滑り込ませる。

ふー、と息を整えて毛繕い。

ここなら、奴も気付くまい。

それにしてもまさか立つちをしてくるなんて、今まで一度もそんな事はしなかったのに。あたしは油断してしまっていた。

奴は力を温存していただけなのか。そして、あたしが油断するのを待つて、……パクつと！ いやいや、それは無いはず。

「別にそんなことしなくとも、俺は十分強い。集落じや、五本の指に入る。そうでなくとも、ヴェルガーは魔眼があるんだ、俺には必要ない」

「今まで集落に引きこもつてた奴が何言つてる。……そうだな、お前一度相手をしてやれ」

ん？

見知った声にそつと様子を伺う。

やつぱりガウディだ。

ガウディも魔王城にいたことに素直に喜ぶ。慌ただしくヴェルガの集落を離れた為にろくな挨拶が出来なかつたのだ。しかし今は再開を喜んで駆け寄れる雰囲気ではない。いつの間にか周りにわんさかと人がいる。

広い殺風景な部屋の真ん中にはガウディと、知らない誰かが向かい合っていた。

「よおし、始め！」

掛け声と同時に双方が動いた。

すぐに三ツ目の大虎へと変化するガウディ、対して槍を構える知らない誰か。

にらみ合いは一瞬。

知らない人は槍を引き、脇締めて勢い良く突を繰り返す。横への難、払いも、ひらりと身をかわすのはガウディだ。しなやかな身体を生かし滑らかな動きで相手を翻弄する。惚れ惚れするほど隙の無い動きはまるで、獲物を狙う虎だ。あれ、そのまんまなようだ。

一見、守りに入っている様に見えるガウディの赤銅色の毛並みが一瞬光またいたと思つたら、勝負が決まつた。

身体を痙攣させゆつくり倒れた槍の人は、地面に伏したまま動かない。

そのまま、ふん、と鼻を鳴らしたガウディが退出。お疲れ様でした。

「口で言つほどは、あるわけだ。余計に問題児だなあ」

今のはずつと場を仕切つていた人の声だ。言葉とは裏腹に面白そうな口調で独りごちる。

それにもしても、この野太い声、どこかで聞いた事があるような……ぐらりとあたしの隠れ家が揺れる。

何事！？

突然、穴の入り口を塞いだ顔とバツチリと目が合つた。

「うわっ！ 鎧の中になんかいる！？」

大声にあたしの毛並みが逆立つ。狭い穴の中で更に身体が縮こまつてしまつた。

ガウンツ！

金属をぶつけたような轟音と凄まじい衝撃があたしに走る。

「こ、こ、こは危険だわ……！」

すぐにでも逃げたかったのだが、身体が思つように動かない。先ほどの衝撃と轟音により平衡感覚がおかしくなつてしまつたようだ。よたよたと頼りない足取りで、なんとか穴から抜け出すとペちゅつと力尽きて倒れてしまつ。

「あ？ どうした、つて姫さんじゃないか」

「ままま、まさか陛下の……！」

「だいじょーふ、だいじょーふ、これくらいでは死なんだろ」

目を閉じてぐつたりしていると、ふわーんと漂う美味しそうな香りに鼻をスンスンさせる。

それと同時にツチアラシの二オイがした。

この二オイは覚えがある。

思い出した。

この目の前の人があたしを、あらうことか袋詰めにした張本人だ。しかもか弱い乙女になんて扱いだ。ダーリンならきっと即座に抱き上げて撫で撫でしてくれて、甘ーい言葉で慰めて、……「ごめんなさい、夢を見ました。

少し回復したあたしはさっそく文句を付けてやらいと口を開ける。

おおお大っきい！

あたしの前に立ち塞がっていたのは、頭の左右に角を生やした悪人顔の大男だ。

人に戻ったあたしの軽く一倍はある身長に、後退仕掛けた後ろ足に力を込めてなんとか踏みとどまる。

猫のあたしにとつてはまさしく山。

巨大な筋肉の塊が立ち塞がっているかのようだ。

負けるものか！

と、勇んでいたあたしだが、美味しいそうな二オイの方が気になつて仕方ない。

気がつけば、大男が手に持つている肉の方にチラッチラッと目が行つてしまつ。

それがあたしに分けてくれたら、袋詰めの件は不問にしてもかまいませんが？

「なんだ、欲しいのか？ ほらよつと、お姫さん」

視線に気付いた大男が、千切つて床に投げ捨てた。
たっぷりとソースがからめられた肉は、ペちゃりと音を立てて床に落ちる。

あまりの凶行にあたしの口は塞がらない。
沸々と沸き上がる怒り。

ちょっとちょっと、あなた！

まさか、あたしにコレを食べると？

あたしはお皿に乗った物しか食べません。

お上品な猫ちゃんです。淑女です。レディなんです。

それなのに、なんという仕打ち、なんという屈辱。

そうしている間にも、ソースが床に染みをつくり、肉片には砂が付着した。お世辞にも人が食べれるものではない。

それなのに、食欲を刺激する匂いだけは健在でやたらと鼻に付く。

怨みがましく床に落ちた肉片と牛男を交互に見つめる。

「ん？ どうした、食わんのか？」という男には、悪氣も敵意も清々しいほど感じられない。

じつじう男が一番たちが悪い。

く～っ、覚えてらっしゃい！

床に落ちている肉片をパクッとくわえる。

いつかその大きい方の肉を奪つてやるー

心の中で呪詛を吐きながら、その場を飛ぶ勢いで離れた。

戦利品をくわえながらダーリンの寝室田指して足を急ぐ。やはりゆっくり食べるのなら安心できる場所に限る。

ついでに羊美少年を捕まえて、砂で汚れたばっちいお肉を綺麗に洗つてもらいお皿に盛り付けて貰うのだ。

ダーリンの寝室は謁見の間を通り抜け、更に奥へと続く通路の先に位置する。つまりとても遠い。

その間にも物々しい警備の騎士達が存在している。許されざる者が一步足を踏み入れようならば、おそらくバッサリと切り捨てられ生きては出られないだろう。

もちろん、ダーリンの愛猫たるあたしは普通に素通りできる。

ただしこの騎士さん達は、あたしが横でくしゃみをしようが、寝転がつて足をパタパタしようが、ちつとも構ってくれないから少し寂しい。一步外へ出たら侍女さん達から黄色い歓声を浴びるというのに。

どこの世界も、女の子は小さいふかふかの生き物を好むのだ。

順調に帰路についていたあたしは、謁見の間を通過しようと踏み込んだ。そこであたしは、ピタリと足を止める。

……見慣れないお客様だ。

謁見の間の重苦しい空氣には、相応しく無い女の子一人だ。

一人はふんだんにフリルがあしらわれた華々しいドレスを身に纏い氣の強そうな眼差しは、いかにも貴族令嬢という雰囲気の女の子。

一人は生活感を感じさせる前掛けに、頭に頭巾を被った素朴な印象の典型的な村娘、という雰囲気の女の子。

二人とも、緊張した様子でダーリンと対面していた。

わかります。

玉座にふんぞり返るダーリンの威圧感は半端無い。

今でこそ、日課のちゅつちゅをしに行つてゐたしも最初は躊躇つた。

ダーリンの玉座までに轢かれた、ふかふかの絨毯の感触を楽しみながら近付いて行く。

途中あたしに気付いたダーリンからお咎めは無い、といふことは「気になるなら近付いてもいいよ」という事だ。

この子達には角も羽も何も生えていない。純粹な人、に見える。ヴェルガーなら人型になつても第三の目を残すように、種族によつて角だつたり羽だつたりそれぞれ誇る部位を残すらしい。

ドレスの裾にも隠してないみたい

するりと裾を翻す。

「きやあ」と可愛らしい悲鳴が上がるが気にしない。

女の子同士、女の子同士。

やましい気持ちは、これっぽっちも存在しない。

当然の事ながら種族によつて、特殊能力なども違つてくるので、ダーリンを守るためにも種族の確認はとても大切な事なのだ。

うーん、この子の「オイ、なんだか気になる。
どこかで会つたかしら?

あたしが引っ掛けたのは素朴な村娘のお嬢さんだ。

ぐるぐると女の子の周りをうろつきながら考える。
もちろんクンクンするのも忘れない。

何だつたかしりっ?
ダーリンなら、わかるかしりっ.

疑問に思いながらもダーリンの方へと首を傾げる。
それを見ていたダーリンが、何かを閃いたように頷き返す。

「レディが気に入った」

え、あたし?

「彼女らをレディ付き侍女にする」

え、え?

よくわからず辺りを見回すと、宰相さんがぱくくり口を開けていた。

つまり、寝耳に水ならじ。

……侍女?

突然のダーリンの重大決定に、呆然と立ち尽くす。

ちよつとちよつとダーリン、それ本気?

侍女の仕事をナメて貰つちやいけない。

あたしがなんとか姫様付きの侍女として見れる働きが出来るようになつたのも、女官長による指導の賜物。しごかれ抜いたあの、語る

も涙思い出すも涙の過酷な日々があつて」。

「あたし、この人に怒られる為にこの仕事をしてるんじゃないのに」と、本氣で膝を抱えた日もあった。

侍女の失態は主の失態。

侍女の品格は主の品格。

手早く的確な作業と主の機微を察する観察力、さらには動作の優雅さを求められるのだ。

何日も掛けて、骨の随まで叩き込まれた。

侍女といつのは経験が無いものが「はい、じゃ、やつてね」と言わ
れて一朝一夕で出来る簡単な仕事では無いのだ。

それなのに、ダーリンときたら全く経験無さそうな高飛車そうな貴族のお嬢様と、純朴無害そうな村娘さんをあたしの侍女に付ける!?

「何を仰るかと思えば、お戯れを。このロートリーン斯家の一人娘た
るわたくしに、この、獣の世話をしろと!？」

即座に文句をつけたのは、予想通りの貴族らしきお嬢様だ。
よく透るいい声だ。広い謁見の間での発言でも、たじろぐ気配もない彼女はこのような場に慣れている感じがする。

対して、村娘さんは始終戸惑いながらあたしとダーリンを視線で追
い、次はお嬢様とダーリンを狼狽えながら交互に見る。

慣れない場の空気呑まれ、発言なんてきっと出来ないだろう。
あたしは、もちろんダーリンに抗議する。

貴族のプライドの高さは、もはやお約束だ。

関われば、あたしの平穏な猫ライフに支障をきたすに違いない。振
り回されるのが目に見えてわかる。

ダーリンつたらお戯れを! あたしだって、そんなの願い下げよ!

心中で思いながらも「いやーー」とは言わない。しかめつ面でダ

ーリンを見詰める。

富廷作法では、田上の者に対する発言は許しを得てから、だ。

普段は、……守っていない氣もする。が、お嬢様が今この場で破つたからには、あたしはきちんと守る。

そう、あたしは富廷作法にも通じた淑女な猫ちゃんだと氣づけばいい！

そして、破つてしまつた自分に恥じるといい！

とか思つたが、残念ながら誰も氣づいてくれなかつた。しょぼんと耳が元氣を無くす。

「国賓として扱うべきわたくしに、床に落ちたモノを拾つて食べるような、この品性卑しい獸の世話をしろと？」

ビシィー！ と指差す先には、肉くわえた猫。もとい、あたし。

な、なんといつ！

しかし、事実でもあるお嬢様の指摘に挫けかかる。

くせう、それもこれも、肉を投げ捨てた大男のせいだ。

お皿に入れてくれれば、こんな辱しめを受ける事なんて無かつたのに。許すまじ！

しかし、こんなことに挫けるあたしでない。

一言。

この「」令嬢に一言、言つてやらなければ氣がすまない。メラメラと沸き立つ鬪志。

猫を舐めるな！

獸が何だ！ 食意地が張つていて何が悪い！？

人が一番偉いと誰が決めた？

食べ物を食べなければ、皆死んでしまうのだ。食べれる時に食べて何がいけないというのか。

ふわっと広がる体毛。ぐぐつと横に引かれた耳とひげ。戦闘体勢に入つたあたしは、熱い闘志を燃やしながらお嬢様の目の前に立ち塞がる。

煮えたぎる思いを、この一言に込める！

「……ふひいっー..」

「……」

「……」

「……」

沈黙が痛い、痛すぎる。

…… ポトッと、口から零れた肉が床に落ちる音だけが響く。

穴はドコー？ あたしが入れる穴はドコにあるの？！

口の中に物を入れながら喋つてはいけません。

口を酸っぱくされて教わったけど、その本当の意味がわかりました。貴族のお嬢様は更に熱を帯びた熱視線でにらんでくるし、素朴な娘さんは、目を丸くさせてあたしを見た。

ダーリンなんか、口に手をあてて俯いちゃつたよー。オマケとばかりに宰相さんの方から何だか噴き出した音が聞こえたよー！

耳が、あたしの耳が新記録を打ち立てる。かつて無い程ペちゃんと頭に引っ付いてしまい、あたしの頭はふんわりとした毛に被われただけ。見事にまるっとしてしまった。出てきて下さーい、耳。

もうこーい、何だかあたし、もうどうなつてもいい。

いや、よくない。

誰でもいいからお願ひだから大声で笑つて、あたしを指をさしてとことん辱しめて欲しい。

誰も彼もあたしを見ずに俯いて田すら合図してくれない。酷すぎる。こつこつ中途半端に「ふくふく」とわれるのが一番痛ましこつこのに。

トントン

ぴぴーん、と耳が反応する。

ダーリンが玉座を軽く指で叩く音だ。

ダーリンが呼んでるー！

謁見の間では珍しく柔らかい雰囲気のダーリンが、優しく包み込むような眼差しであたしを見ていた。これは、きっと慰めてくれる予感がある。やっぱりダーリンはあたしの味方だ。

ダーリン！

今までの鬱々とした気分が一気に吹き飛ばされる。

勢い良く玉座に登り、ひとつとダーリンに身体を引っ付ける。……

あつたかい。

撫るように指先であたしの頭を撫でてくれた。

嬉しくなつて、ダーリンの手に頭を寄せる。『ロロロロロ。耳下から喉元へと滑る指先にうつとうと目を細める。ダーリンの撫で撫で技能は確実に向上升しています。』ロロロロロ。あたしを脇目に話がどんどん進んでいるが、今はとても忙しいので構つてられない。『ロロロロロロロロロ。

「以後しっかりと励むよ！」

……はつ！

気がつけば、何だか話が終わつた雰囲気にあたしは慌てる。ダーリンにやり込められて、悔しげに顔を顰めるお嬢様が見える。ダーリンの魅惑の指先にまんまと誤魔化されてしまった。

ちよつとちよつと、あたしまだ了承してな、あい？！

急いで顔を上げようとして、ひげが強い力で引っ張られる。

ひげ。

あたしの大事なひげ。非常に高性能の危険察知能力を備えたあたしの生命線。

その大事な大事なあたしのひげを、力任せに引っ張つた不届き者が

いる。

……いたい。すぐいたい。

引っ張られた痛みがじんじんとあたしを襲つ。

まさか、ダーリンが引っ張つた？ なんで、ビリヒー！？

「やめで！」と非難の眼差しをダーリンに向けると、ダーリンは目を丸くし驚いた表情であたしを見ている。

「…………」

『…………』

苦しい沈黙の末、先に痺れを切らしたのはあたしだった。身動きをして、再びひげを引っ張られる痛みに身体を縮める。続いてダーリンが、そつと手を移動させようとし、痛みを感じたあたしも一緒に顔を移動させた。すびすびとあたしの鼻息が荒くなる。

「…………」

『…………』

わかつた、わかつてしまつた。

あたしの馬鹿、大馬鹿！

泣いてしまいたい。

犯人は、ここでのお肉のソースだ。

あたしの口元にべつたりと付いていたソースが、しつかりとダーリンの袖口に引っ付いて固まってしまったのだ。

「だれか、刃物を、」

「//://://://://...」

ダーリンの命令を搔き消すよつて、あたしの甲高い声が謁見の間に響く。

ひげは嫌、ひげは駄目、ひげだけは切らないでー！

「わかった、わかったからレディ、少し、」

「//://://://://...」

いたたたた、ダーリン、動かさないで、引っ張らないでー！

生命の危機とも言える、ひげの危機に興奮してしまったあたしは、自分で自分の首を絞めるが如く慣れまくっては痛みに悶える。

そんなあたしに冷静を取り戻したのは、やはりダーリンの一声だ。この日、ありがたくもあたしは魔王陛下より新たな称号を賜った。

「いいからバカ猫、少し黙れ」

地を這いつぶつな、背筋も凍る聲音にて、あたしはペレシャリと口をつぐむ。

再び刃物を手配するダーリン。

ダーリンの暴言はひとまず置いて、とても逆らえる雰囲気でよいぞ
いません。

ひげが無くては、魔界で生きてはいけません。
でも、逆らえばぶちつとされちゃう気もします。

あたし、終わった……

迫りくる研ぎ澄された刃先を前に、神妙に目を閉じる。

こわい、すぐこわい。

じわりじわりと恐怖があたしの身体を這い上がる。
すびすびすびと自分の荒い鼻息だけが耳を占めた。

サクッ、……サクッ

と、何かを断つ音に身を震わせる。
そつと目を開ければ、無残にも切れていたあたしのひげ……、では
なく、ダーリンの服。
ポツカリと袖口が切り取られたそれは、なんだか滑稽に見えるかも
知れないが……
とんでもない！

ダーリン、大好きだわ――――！

……後に思えば、服の切れ端を顔にくつ付けながら、全身で愛をい
っぱい表現するあたし方こそが、さぞかし滑稽だつたに違いない。
そのあと新たに侍女に任命されたお嬢さん方に、ぬるま湯で優しく
ひげをもみもみされました。

初仕事、いさなので、『メンナナイ。』

猫は見た！

「じゃあ、マリベルちゃんは隣の大陸の貴族さまなのね、すいこわ！」

「軽々しく呼ばないで頂ける？ 王都の一等地にも屋敷を持つてますのよ。本来ならば貴女が口を聞けるような立場の人間ではないのみに感謝します」

「……その祈りはなんですか？」

「私のいたファンタベリーの村では、いつも森の守り主エリーゼ様に祈りを捧げていたの」

「ふうん、聞いたことも無いわ。さぞかし辺境の縁豊かな場所でしょうね」

「そうなの！ お花もたくさん綺麗に咲くのよ

「……」

スゴいわ、この子。嫌味を言われたことも気付かない！

今のは、遠回しに「あんたの村は超ド田舎だから、私ぜんぜん知らなかつたわ～」って意味なのに。

純粹培養の村娘さんには、貴族の言ひ回しありがよつと分からぬいだらう。

名前は、Hリー・ファンタベリー。

その守り主様の名前を貰つたと、嬉しそうにあたしに紹介してくれた。もちろん、あたしも「にゃ」と尻尾を上げて軽く挨拶。ファンタベリーの森はあたしの国で、地図の端っこにひつそりこつそつと存在する。Hリーはあたしと同国のおの子だったのだ。

どおりで気になる二オイがしたわけだわ

くふくふ二オイに行くと、慣れ親しんだ草木の香りがほんわりと匂う。

やはり故郷の二オイは安心する。

「わあ、レディ様」

Hリーが嬉しそうに手を伸ばす。

あ、抱っこは駄目よ！

ダーリンしか許してないんだから

ひらりと身を避わすと少し残念そうに眉を下げる。

ジリジリとした熱い視線に顔を向けると、貴族のお嬢様が不機嫌そうな眼差しであたしを見ていた。

この子の名前は、マリベル・ロートレンス。

隣の大陸の伯爵令嬢様だ。

あたしが視線に気付くと「ふんつ」と顔をそむける。あたしが欲しかった混じりけのない黄金色の髪が揺れた。

生粋のお嬢様としては、猫のあたしに仕えるところのは面白く無いのだろう。

けれど、あたしは侍女のなんたるかを彼女たちにビシバシと叩き込む予定なので、悪しからず。

「もひー。部屋の大きさはともかく、こんな埃っぽいところに押し込まれるなんて最悪」

「ずっと使つてないつて仰つてたもの。私は嬉しいわ、こんな広くて素敵な部屋、初めて！」

「いいですわねえ、貴女は。……まあ、調度品の質 자체は悪くは無いですわ」

つつつ、と白く綺麗な指が家具をなぞる。
指に付着した埃を拭てマリグーレは頬をこかか。思へ奇麗に整え

られた彼女の眉は、形を崩すと神経質そうな印象が際立つ。対してエリーは「ふふふ」と、嬉しくて堪らないよつで踊るよつな足取りで掃除を再開する。

「なになれるの、埃が舞うじゃないのー。」

「ふふふ、ごめんなさい」

それでも、止める気配はない。
もつもつと舞い踊る埃。

ムズムズする、鼻がムズムズするわ！

卷之三

「アーティ様っ、……………！」

「どこか慌てたようなエリーの声が聞こえるが、もう遅い。

「くしゃり、くしゃりんりー、くしゃり、しゃー！」

まつたぐ、もうー。

くしゃみの連発でもまだムズムズとする鼻を、前脚を使って「コンシロシ」と擦る。

「埃は、飛んで行きましたわね……一瞬で……」

近くの柱に張り付きながら呆然と呑くマリベルと、何故か顔を守るよつに床に蹲るエリー。

いつのまにか開け放たれていた窓と扉を見つつ、あたしに視線を向ける。

「ドリゴン並み……？」

失礼なつ、ちょっと魔力が漏れただけじゃないじゃないのー！

……くしゃー

「室長、あの、この間はありがとうございました」

「……それで、その、良かつたら、これ

可愛らしい女の子が、もじもじと包みを取り出し差し出す。

差し出された相手は、あちこち好き勝手に跳ねたボサボサの髪に上等だがよろよろによれた服に身を包む、野暮ったい雰囲気の男だ。ひょろつと長い背丈が、男の頼りない印象を更に強調している。けれど女の子は頬を真っ赤に染めて落ち着きなく視線を男と床をさせ、迷わせ、もじもじと居心地悪そうに足を擦り合わせる。

「あ、いや、ごめんよ。妻がいるから、そういうのはひょりと……」

「ち、違うんです！　そういう意味じゃなくて、お礼！　お礼なんです！」

お礼、と言つにはあまりにも男を意識し過ぎていて、説得力がない。しかし、大義名分が変わった男はあつさりと包みを受け取ってしまった。

「まあ、そういうことなら」

「あ、ありがとうございます！」

途端に花開いたように満面の笑顔で包みを手渡すと、頬を両手で押さえて足早に去つていった。

残された男は可愛らしく包装された贈り物を片手で持てあましながら、困った素振りで頭を搔く。

「まいったなあ」

察するに男も女の子の想いは気付いていたのだろう。冴えないのは見た目だけであって、男女の機微には聴いらしい。既婚者ならばそ

れも当然か。

しかし言葉で言つぱり困つた口調では無く、またさうでもないの
だろ？。

……むふ

むふふふふふふ、見いちやつた！

一部始終を見守つていたあたしは、物影からひょりりと顔を出す。本格的に掃除を始めた侍女一人の部屋から逃げ出したあたしは、思わぬ出来事に遭遇して二ンマリ。

すぐに気配に気付いた男、エメリの旦那さんが振り返る。

「……レ、レディちやま、見てたのかい？！」

「ふふ、見ちやいました！」

口止めの要求は後で考えるとして、とりあえず今はあたしが見たことを証明するためにわざと姿を晒す。

旦那さんは意志の疎通が出来ないので、後であたしが『うふ、やるわね色男、エメリがいながら浮氣するなんて……。可愛かつたなあ、あの頭に小さな羽が付いた女の子』と、にやん言葉で言つても旦那さんは通じない。当事者である旦那さんと女の子、そして目撃したあたししか知り得ない情報を細かく伝えることは難しいのだ。よつて手つ取り早く姿を見せる。

そのまま颯爽と何食わぬ顔で散歩を再開しようとしたあたしは、普段からは考えられないほどの素早さで迫られ、あつという間に退路を塞がれる。逃げる隙も無くあつたりと捕まつた。旦那さん相手な

ら大丈夫だと踏んでいたのだが、それだけ必死だったのだろう。うん、窮鼠猫を噛む。

ぶらーん、とあたしの両足と尻尾が揺れる。

前足の下に手を引っ掛け対面するようにあたしを抱っこした旦那さんは、あたしの瞳を覗き込んだ。

「黙つてるよね？ エネリには、もあらん言わないよね？」

「いやーん

「それってどっちの意味の『いやーん』？！

『わかつた、黙つてる』？ それとも『そんのしらない』？！

……レディちやま、考えて『らん？

自分の番が、他の女の子にプレゼント貰つたなんて、エネリが知つたら悲しむと思つよ、ね！ ね！

ふいつ、と顔を背ける。

だつたら、はじめから貰わなければいいのよ

許可なく抱っこしていいのはダーリンだけなのに。

不意を突かれたあたしは不機嫌を隠さずに尻尾を揺らす。

「せつかくくれるって言つてるんだから、貰わないと勿体ない、……じゃなくて、可哀想でしょ！？」

女の子は貰つてくれたのに、つて悲しむ。
エネリは貰つたでしょ、つて悲しむ。

中途半端な優しさが一番だめ！

いつそ「浮氣は男の甲斐性だー！」ぐらりと開き直れば、少しは見直したかも知れないのに。が、その場合は完全にあたしを敵に回しますが。

あたしはエネリママが大好きなのだ。

つーんつーと鼻を反らして無視を決め込む。

「レディちゃんまーーー！」

激しく身体を揺さぶられ、胸からアレが上がる感覚。

か、かけるわよ……、このままだと、おえつとかけるわよー…？

「何やつてんだ、あんた」

聞き覚えのある険の帶びた聲音に、あたしを抱っこしていた旦那さんの手が緩む。その隙にあたしは、くねつと身体を捻つて脱出した。

「ガウディ、いや、これは」

「ふいー、助かつたわ

尻尾をピンと立てながらあたしはガウディの方へと避難する。何だか前にも似たような事があつたような。

今回は人型なガウディは、あわあわと言い訳をしようとする旦那さんに、フンッと鼻を鳴らすとすぐに興味を無くしたよつて皿をそらし踵を返す。

「ガウディ、ある程度門でふるこに掛けられてるとはいえ、完全じ

やない。城の中も入り組んでいるし暗がりも多いから慣れない内はあまり一人では、

「ウルサイ、あんたに言われなくてもわかってる」

言い募る田那さんを遮り、どこか突き放すようなガウディ。

んんー？

あたしは首を捻りながらガウディの後に付いていった。

もしかしなくとも、ガウディと田那さんは、あまり仲がよろしくないらしい。

でも、どちらかと言つと田那さんはガウディの事を気にかけてたし、でもでも、ガウディはあまり話したがらないような、反抗しているというか。

昔、尻尾でも踏まれたのかしら

前を歩くガウディの様子を探る。

『ええと、田那さんは仲がよくないの？』

「……そういう風に、見えるか？』

『うん』

やがて庭の片隅にある陽当たりの良い場所で、虎型に戻ったガウディは、じろんと寝転がる。

あたしにとつたら、ちょっとした小山だ。赤褐色の山をよじよじと登る。やがて安定した場所を見つけたあたしはそのまま寝そべる。暖かいガウディの背中の上に乗るのは、あたしも仔虎ちゃんも大好きだ。いつも競って登りに行くが、今は仔虎ちゃんはいないのであたし独り占めである。

鼻をすんすんしたガウディは少し変な顔をした。

『知らない奴の二オイがする』

辺りには誰もいない。

少し首を傾けたあたしだか、すぐに思いあたつた。

『そりなの、あたしに侍女が一人も付いたのよー。』

エリーとマリベールの顔を思い浮かべながら、侍女のなんたるかをガウディに説明する。

非常に生暖かい日をしながら、小山からずり落ちたあたしをべろんべろんするガウディ。

『そりか、がんばれよ』

果てしなく子ども扱い……

やがて、べろんべろんし終えたガウディはふつと溜め息を付いた。気が緩んだのか、ポツリと呟く。

『……嫌いな訳じゃない。ただやつぱり、認めらんねえ』

これは、先ほどあたしが聞いた旦那さんに対するガウディの気持ちなのだろう。

それ以外は何も言わない。自分の手の上に顎を乗せて、じつと一点を見詰めて考え込んでいる。

その様子は、どこか迷子の子供の様な印象を受けた。

魔界では何より強さが求められる傾向があるので、いかにも弱そうな旦那さんはガウディにとって、非常に複雑な立場にあるのかも知れない。

ガウディが何も言わない以上は、あたしは踏み込んではいけない。

『あたし、てっきり尻尾でも踏まれたのかと思っちゃった』

誘惑に負けたあたしが、ふさふさ揺れるガウディの尻尾にちょいちょい手を出しながらポツリと呟いた言葉に、ガウディは爽やかに返してくれた。

「何言つてんだ。そんな事されたらとっくの昔に殺つてるよ」

『だよねー、…………』

…………。

いいいやあああ！

しつぽおお！

意外なトコロに即！爆・発の導火線が！！

あたしといえば、踏むのは朝飯前、散々じやれついては噛み噛みしたり、蹴つたりパンチしたり、そのまま疲れて寝むりこけて、タラつと涎たらしたり……

あわあわあわわわわっ！

じゃれついてごめんなさい！
噛み噛みしてごめんなさい！
連續猫キックごめんなさい！

内心荒れ狂う心境とは裏腹に、あたしの表情は凧いでいた。

職業柄、あたしは顔には出さないのだ。貴族のお偉いさん方は、あたし達、侍女侍従をいないものとして扱う人が多いので、例えすぐ隣で控えていようが平氣でヤバい話を大きい声で話したりするのだ。その時に少しでも注意を引けば、まさしく首が飛ぶ。今回もその要領で、あたしは尻尾にちよつかいを出していた手をそつと引っ込めながら必死に無表情を装つた。

う、後ろ足がムズムズする、ムズムズするわ！

それでも衝動には逆らえず、あたしは久々に逃げた。

…… おすわり後退！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081w/>

魔王陛下の愛猫

2011年10月15日22時35分発行